

匹見町埋蔵文化財調査報告書第31集

(主)六日市匹見線元組工区県単道路改良工事に伴う発掘調査報告書

石ヶ坪A遺跡

2000年2月

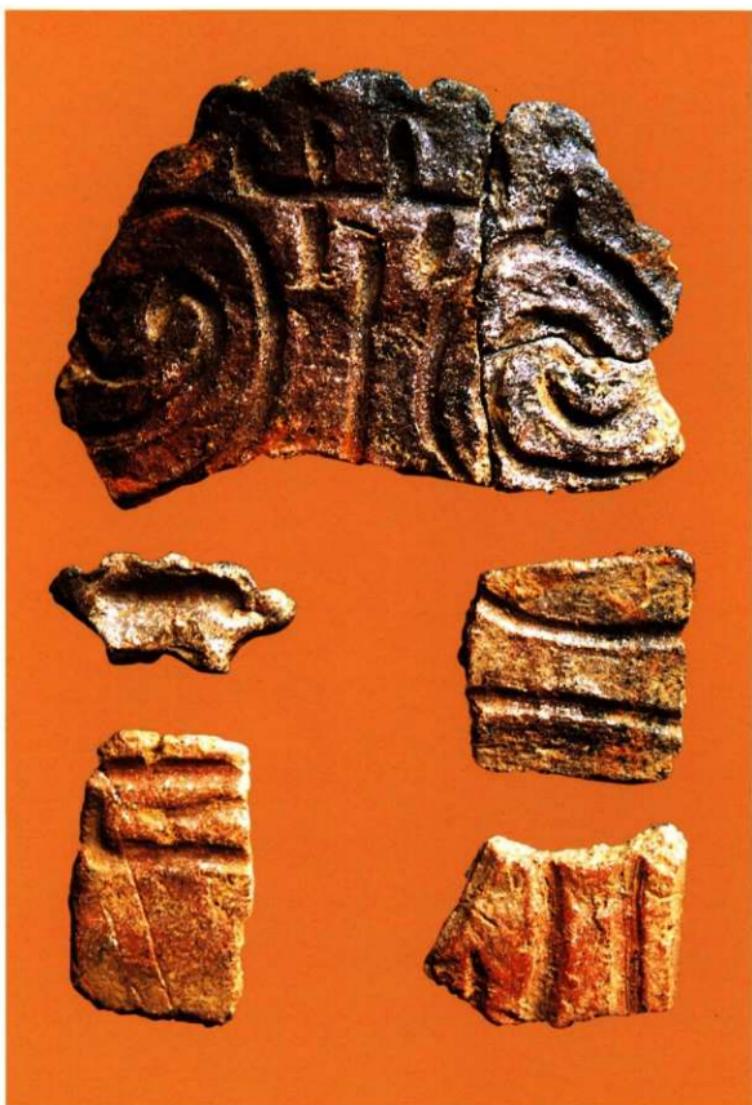
島根県匹見町教育委員会

(主)六日市匹見線元組工区県単道路改良工事に伴う発掘調査報告書

石ヶ坪 A 遺跡

2000年2月

島根県匹見町教育委員会



阿高式土器

例 言

1. 本書は、島根県益田土木建築事務所の委託を受けて、匹見町教育委員会が平成11年度に行った
(主)六日市四見線元組工区県単道路改良工事に伴う、右ヶ坪A遺跡の発掘調査報告書である。

2. 調査は、島根県教育委員会文化財課の指導と協力を得て、次のような体制で実施した。

調査主体	匹見町教育委員会		
調査員	匹見町教育委員会文化財保護専門員	渡辺 友千代	
調査補助員	匹見町教育委員会主事	山本 浩之	
	匹見町埋蔵文化財調査室	栗田 美文	
調査協力者	大賀 幸恵 大谷 真弓 渡辺 聰		
	斎藤美代子 森本美智子		
調査指導	島根県教育委員会文化財課		
	山口大学人文学部教授 中村 友博		
	島根大学法文学部助教授 山田 康弘		
事務局	匹見町教育委員会教育長 寺戸 等		
	匹見町教育委員会次長 渡辺 隆 (平成11年8月31日まで)		
		大谷 良樹 (平成11年9月1日から)	
発掘作業員	斎藤 直行 栗田 修 村上 武司 中間昭二郎 日熊 善夫		
	岡本 二夫 森脇 雅夫 栗田 定 栗田 勉 藤本 和正		
	長谷川時子 大谷ミツコ 大谷 幹子		

3. 発掘調査に際しては、益田土木建築事務所匹見出張所の飯田技師をはじめ、島根県教育委員会文化財課に終始多大なご協力をいただきとともに、山口大学人文学部の中村友博教授、また島根大学法文学部の山田康弘助教授からも、一方ならぬご教示を得たことに対し、ここに合わせて感謝の意を表したい。

また、発掘現場においては、地元の方々にご理解とご協力を得て、ここに無事発掘調査を終えることができたことに対して、お礼を申し上げたい。

4. 今回の調査において、柱穴状遺構-P、土坑状遺構-SK、溝状遺構-SDとした。なお現場あるいは編集に使った現地地図は、匹見町土地改良区の協力を得た1/1000の縮尺のものであり、また位置図などはワールド航測コンサルタント(株)による縮尺1/25000を使用した。なお現地における標高測量は株式会社昭和測量設計事務所に委託とした。

編集にあたっては、山本浩之・栗田美文・大賀幸恵・大谷真弓らが携わり、執筆・編集は渡辺友千代が行った。

目 次

第1章 発掘調査の経緯と経過	(渡辺友千代)	1
第1節 発掘調査に至る経緯	1	
第2節 発掘調査の経過	1	
第2章 地形的立地と歴史的景観	(渡辺友千代)	2
第1節 地形的立地	2	
第2節 歴史的景観	2	
第3章 調査概要	(渡辺友千代)	4
第1節 はじめに	4	
第2節 調査の概要	4	
1. 調査区の設定	4	
2. 基本的層序と堆積状況	6	
3. 造構	11	
第4章 出土遺物	(渡辺友千代)	19
第1節 はじめに	19	
第2節 出土遺物の種類と傾向	19	
第3節 実測遺物	19	
1. 繩文実測土器	19	
2. その他の実測土器・土錐	26	
3. 実測石器	27	
第5章 まとめ	(渡辺友千代)	29

挿図・図表目次

第1図 位 置 図	2
第2図 石ヶ坪遺跡と周辺の遺跡分布図	3
第3図 地形断面図	4
第4図 調査区配置図	5
第5図 土 層 図 (1)	7
第6図 土 層 図 (2)	9
第7図 杜穴の陥入状況図	10
第8図 上坑の陥入状況図 (1)	11
第9図 上坑の陥入状況図 (2)	12
第10図 各区の指示・遺構図	13~14
第11図 G・H区の指示・遺構図	15
第12図 遺物分布状況図 (G・H区)	17
第13図 上器実測図 (1)	21
第14図 上器実測図 (2)	23
第15図 土器実測図 (3)	24
第16図 土錐実測図	25
第17図 石器実測図 (1)	26
第18図 石器実測図 (2)	27
第1表 遺構計測表	16
第2表 出土遺物集計表	20
附録 おもな凹見の遺跡消長表	32

図版目次

図版1 鳥瞰する遺跡と周辺部

図版2 遺跡の近景と作業風景

- | | |
|------------------------|---------------------------|
| 1. 紙祖川から捉えた遺跡の全景（北西から） | 2. 対岸からみる遺跡の全景 |
| 3. 西側からみた遺跡の全景 | 4. 北西側からみた遺跡の近景 |
| 5. 南東側からみた遺跡の近景 | 6. 山側から県道を挟んで調査区をみる（北東から） |
| 7. I調査区の発掘風景 | 8. G調査区の発掘風景 |

図版3 各調査区の土層堆積状況

- | | |
|------------------|------------------|
| 1. A調査区の状況と北壁 | 2. C調査区の状況と北壁 |
| 3. C調査区の東壁（北西から） | 4. G調査区の西壁（南東から） |
| 5. H調査区の東壁（北西から） | 6. H調査区の西壁 |
| 7. I調査区の北壁（南東から） | 8. I調査区の東壁（中央部） |

図版4 遺構と遺物の表出状況

- | | |
|-------------------------|---------------------|
| 1. 柱穴状遺構の表出状況（D調査区） | 2. 土坑の表出状況（H調査区） |
| 3. 土坑・配石遺構の表出状況（G・H調査区） | 4. 柱穴状遺構の表出状況（I調査区） |
| 5. 土器の出土状況（H調査区） | 6. 阿高式上器の出土状況（H調査区） |
| 7. 打製石斧の出土状況（H調査区） | 8. 石器剥片の出土状況（G調査区） |

図版5 G・H調査区の配石出土状況

- | | |
|-----------------------|-------------------|
| 1. G・H調査区の配石遺構（南から） | 2. G調査区の配石遺構（西から） |
| 3. H調査区からG調査区の配石遺構をみる | 4. G調査区の東部の配石遺構 |
| 5. 北側からみたG・H調査区の状況 | 6. 東からみたG調査区の配石遺構 |
| 7. SK04遺構の検出状況 | 8. 北側からみた遺構完掘状況 |

図版6 各調査区の遺構検出状況

- | | |
|----------------------------------|--------------------------|
| 1. D調査区のP01・P02・P03・SK01（西から） | 2. E調査区のP02・P03・P04（南から） |
| 3. F調査区のSK01（北から） | 4. G調査区の東部の遺構 |
| 5. G・H調査区の接境部の遺構（南から） | 6. H調査区のSD01（北から） |
| 7. I調査区のP08・P09・P10・P11・P12（南から） | 8. I調査区の完掘状況（南から） |

図版7 1. 繩文土器

- | | |
|---------|---------|
| 3. 繩文土器 | 2. 繩文土器 |
|---------|---------|

図版8 1. 石器類

- | | |
|--------------------|----------------|
| 3. 第13図-5の阿高式上器（表） | 4. 同図の阿高式土器（裏） |
|--------------------|----------------|

第1章 発掘調査の経緯と経過

第1節 発掘調査に至る経緯

本報告する発掘調査は、平成11年3月29日付の益上第2190号による「平成11年度県発注工事に伴う遺跡について」の協議によって発生したものである。

その協議の中には石ヶ坪遺跡に関する「(主)六日市匹見線元組工区県単道路改良工事」に伴うものもあったため、匹見町教育委員会では同年4月2日付の匹教第150号において、該当地は周知の遺跡であるため、調査が必要である旨を通知したのであった。その後、主体者側との協議において「早急に調査を願いたい」との要請を受け、同年4月16日付で文化庁宛に発掘調査の報告書類を提出したのであった。

第2節 発掘調査の経過

発掘調査は工事予定地である、つまり石ヶ坪遺跡の山裾側を中心に、範囲の確認調査の形式(トレチ方式)で始めることにしたのである。それは平成11年4月16日からであり、4層上位部に少量の土師器片が出土した。そして5層には、阿高系の繩文土器や石器類とともに、本遺物に伴うと想定される遺構も下位面に検出されたのであった。

そのため、同年7月27・28日の両日に島根大学法文学部の山田康弘助教授を招請し、発掘調査の指導を得た。そして同年8月4・5日には、山口大学人文学部の中村友博教授にも指導を仰ぎ、性格的には、平成元年度に調査した時のものと同様のものであることを確認したのであった。一方その間、7月26日には子供たちを中心とした「親子発掘体験」の行事も実施するなど、意義深い調査であったといえる。

なお工事は、できる限り埋蔵部に支障のないように行うということなので、範囲確認程度に止め、現地調査は同年9月30日をもって無事終えることができた。

(渡辺友千代)

親子発掘体験



発掘に興ずる子供たち



土器がみつかったヨ

第2章 地形的立地と歴史的景観

第1節 地形的立地

島根県の西南端に位置する匹見町は、その西南側を広島・山口の2県に接した山間地に所在する（第1図）。

そうした中国山地の脊梁部に所在する匹見町は、中生代に形成されたという数条からなる北東一南西方向の断層谷が顕著で、その基盤層は流紋岩から生成されているといふ。また西日本に位置するとはいひ、中国山地中という高位の標高（200～1,300m）から、大半は暖温帯落葉広葉樹林の生い茂るといった景観下にある。そのため林相は、ミズナラ・コナラなど主林としたナラ林帶で占められ、そこにはツキノワグマを筆頭に、サル・キツネ・タヌキ・アナグマ・テンなどの中小動物がみられる。また匹見・紙祖川などの上流河川には、ゴギ・ヤマメ・アマゴなどの冷水を好むイワナ属やサケ属の魚類も生息するといった環境である。



第1図 位置図

匹見町大字紙祖イ530番地ほかに所在する石ヶ坪遺跡は、広さ約5,000m²あって、その標高290.2m～291.5mを測り、細長い河岸段丘の右岸に立地する（第2・4図、図版1・2）。

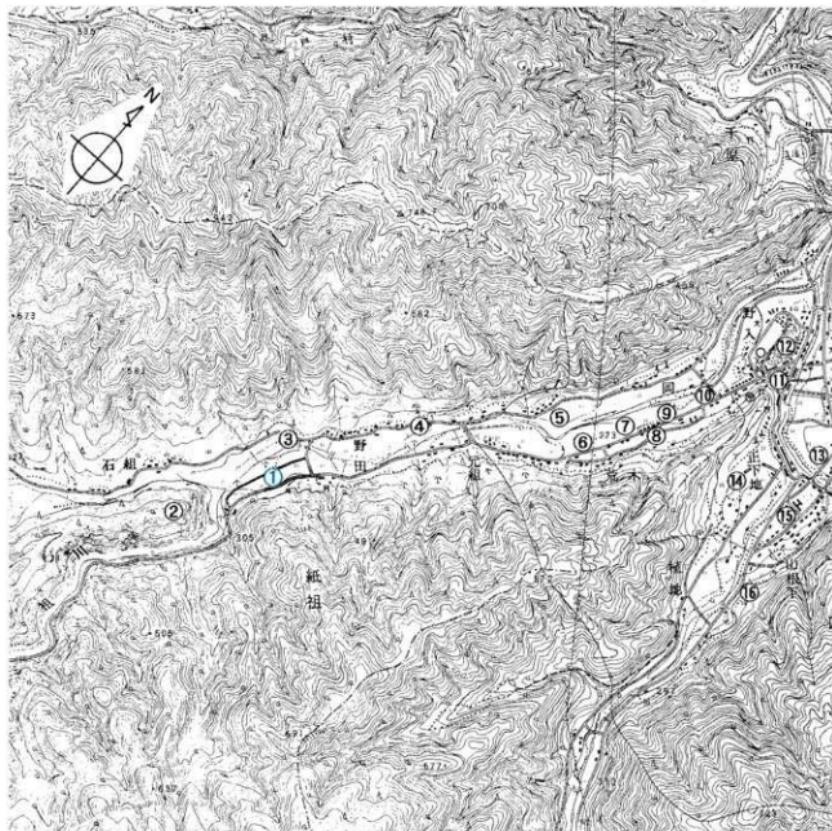
本地は、南西側を比高差約4mを測って、紙祖川が断層谷の沿い北東流し、一方、南東側は急峻な山地がせまっている。そして上流域にあたる南西端は、紙祖川に七村川が相会するという合流地であるものの、平地は尖滅

しており、対する下流の北東側に向かっては河岸段丘が発達していて、そこは水田・民家などの生活域とした可耕地という、立地下に本遺跡は存在している（第2図）。

第2節 歴史的景観

本地点を中心として狭長な河岸段丘が伸びている下流域は、現在の生活可耕地でもあるが、歴史・原始古代遺跡なども分布する地区であり、とくに1.5キロ下流域の匹見川と紙祖川とが合流する周辺に密集している（第2図）。これは大半が山岳地という立地性から、つまり僅かな平地を形成している河岸段丘に求められた結果ではなかったかと考えられる。

例えば、中世期の遺跡では山城であった小松尾城が卒近にひかえており、そして対岸には中・近世を中心とした陶磁器類が出土した森ノ前遺跡、また1キロ下流には中世初頭頃の住居址が検出されてた長ヶ戸遺跡がある。そして原始古代遺跡は顕著で、古墳期の善正町遺跡、縄文晩期の前田遺跡、とくに環状列石遺構と想定される水田ノ上遺跡は、1キロ下流の同河岸にあって、本遺跡との立地上からも注意される遺跡である。



凡例

- | | | | |
|----------|---------|-----------|----------|
| ① 石ヶ坪A遺跡 | ② 小松尾城跡 | ③ 森ノ前遺跡 | ④ 前田遺跡 |
| ⑤ 善正町遺跡 | ⑥ 長グロ遺跡 | ⑦ 水田ノ上遺跡群 | ⑧ 下正ノ川遺跡 |
| ⑨ 長通遺跡 | ⑩ 石仏頭遺跡 | ⑪ 神田遺跡 | ⑫ 謙訪城跡 |
| ⑬ ヨレ遺跡 | ⑭ 松川原遺跡 | ⑮ 下手遺跡 | ⑯ 和田古墳 |

第2図 石ヶ坪遺跡と周辺の遺跡分布図

このように、本地図には本遺跡を南西端として、北東側に形成された狭長な河岸段丘に遺跡が分布しているのである。しかも各期に渡っているということから、紙祖川がつくった本河岸段は、古くから最良の生活域であったものであろうと想像される。

(渡辺友千代)

第3章 調査概要

第1節 はじめに

総称する石ヶ坪遺跡は、県営圃場整備事業に伴って、平成元年度に本格調査^(註1)が行われた。ただし調査の中途で“極めて貴重な遺跡である”という専門家の意見から、町が買い上げて保存することになった。そのため全体の1/4にあたる約1,200m²しか調査されていない。しかも掘削したといつても、上位部の3層までのみとしたため、下位部の状況は把握していないのが実状であった。

また今回の調査では、石ヶ坪遺跡と同地点域のものではあるものの、今調査のものを「石ヶ坪A遺跡」と別称することにした。それは前回（平成元年度）の調査分のものも混同させないため、便宜上の呼称であることを最初に断つておくことにしたい。

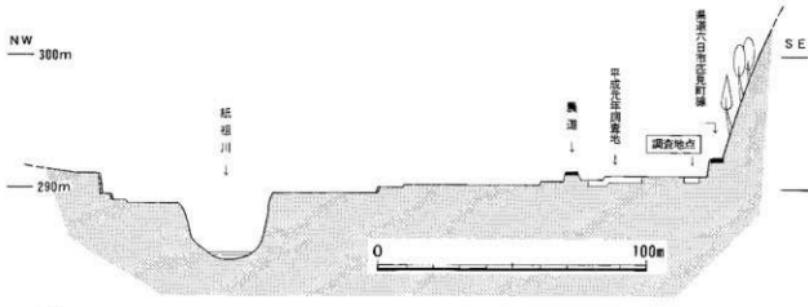
第2節 調査の概要

1. 調査区の設定

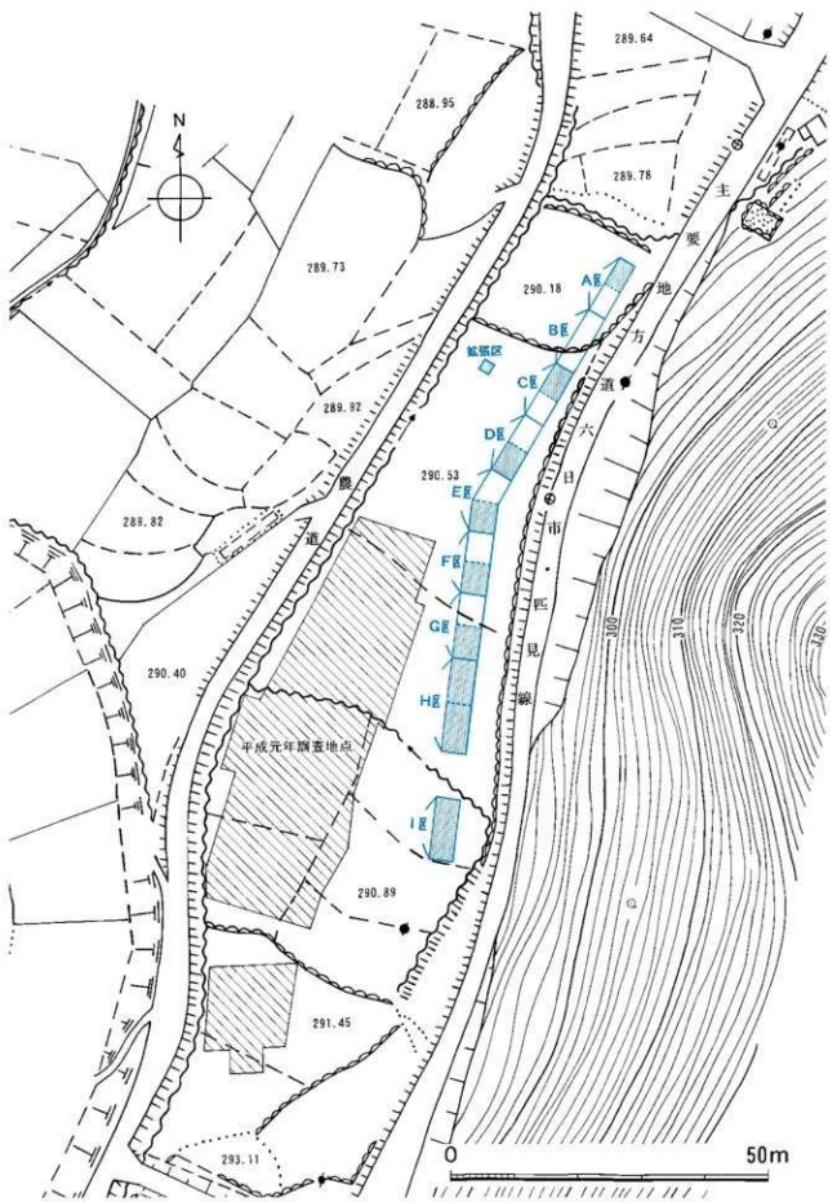
工事予定地は、遺跡の西側にあたる山裾を北北東—南南東方向に貫道する県道であったため、その影響を生じる幅員を考えて設定することにした。

それは、まず下流側にあたる北東端を基点として、その基点から57°の角度で南西方向を測り、そしてさらに地形を考慮し、84°の角度をもって40mを測って延長した。これは調査区の西辺側の計測で、また調査区の幅とする山寄りの東辺側は、基点地点を幅3mとし、そして南西側45m地点は幅4mとして、これを一直線状に延長させるといった変則的なものとした。またそれ以降の40mを測った南半側は、同様に4mの幅をもって並行するものとしたのである（第4図）。

こうした細長い調査区を設定したため、各区割をし、そして区割ごとに地区名を附すこととした



第3図 地形断面図



第4図 調査区配置図

のであった。それは下流の北側から凡そ10mごととし、アルファベットの大文字を用いてA・B・C……の順でHまでとしたのである（第4図）。ただし、E調査区は屈曲地点となり、またH調査区は長さ15mのものとなってしまった。そしてB調査区としたものは調査せず、またH調査区は遺物などの出上状況から全面調査するといった不等一な取り方となつた。

なお調査の途中で、H調査区において比較的遺物・遺構が捉られたので、さらに調査区を延長することにした。しかし、隣接の南側は伏流水で沼化し、また排水管が埋没しているなどの支障があったため、7.5mを測ってこれを外し、そしてその地点から南側には幅4m、長さ10mのI調査区と称するものを設けていたのである（第4図）。

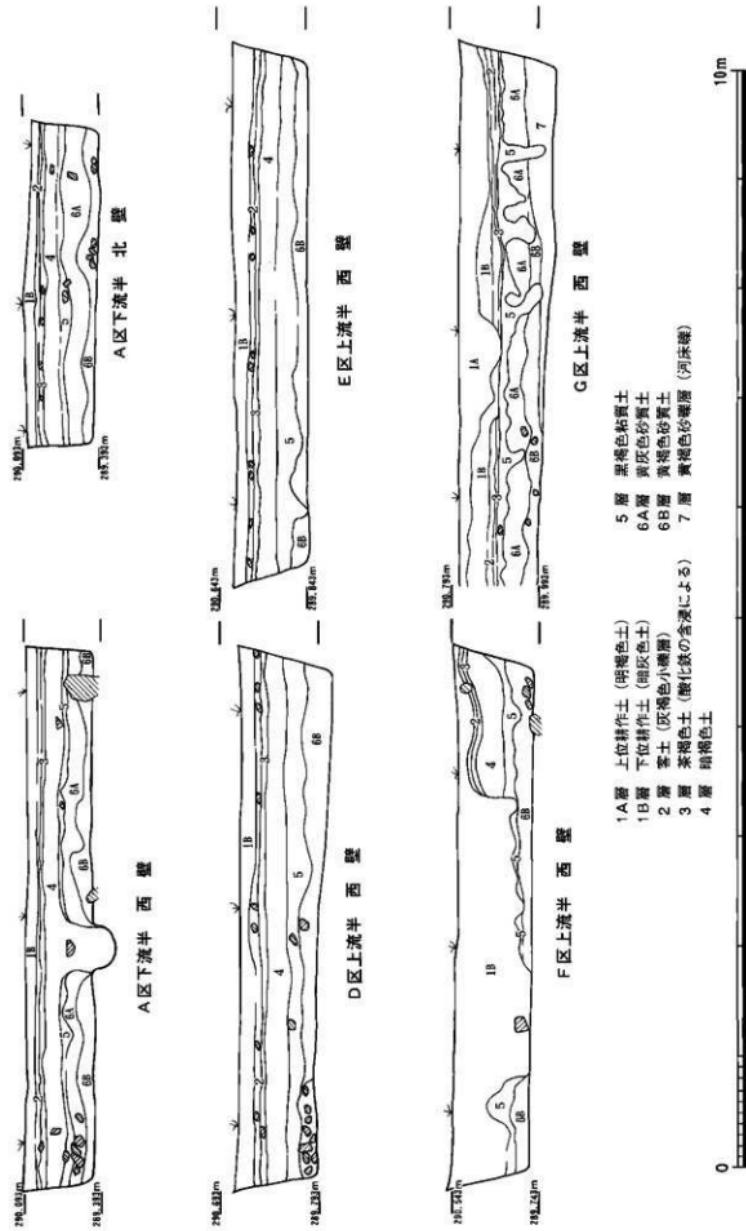
2. 基本的層序と堆積状況

基本的層序 本遺跡における基本的な層序は、1層の耕作土（A・Bに分層）、2層の客土と思われる灰褐色小礫層、3層の暗褐色土に酸化鉄が含浸した茶褐色土、4層の暗褐色土、5層の黒褐色粘質土、6層の黄灰～黄褐色砂質土（A・Bに分層）、7層の河床疊層の順で堆積していた（第5図・第6図・図版3）。ただし各調査区においては同一に堆積しているのではなく、F調査区などでは深層に至る人為的行為が行われたらしく部分が見受けられたり、また1層とした耕作土層の堆積状況には、再造形（マチダオシ）した様子が窺われたりしたのである。そして、中には4層・5層の暗褐色～黒褐色土層のように、分層すべきかどうかを判断し兼ねる層位も部分的にみられたのであった。そしてこの基本層序は、A～F調査区のもので、つまり4層の山土の堆積層を含んでいるため、そこには地点差による層順の捉え方などに問題もあるかと思われる。

各調査区の状況 A調査区は、北東端に設定したもので、その堆積状況は順当（基本層序）のものであった（第5図・図版3-1）。このうち1～3層は薄く水平に堆積しており、暗褐色土の4層は20～25cmを測り、本区のうちでは厚層であった。遺物は、2期と想定している中世前半の土師器や瓦器類、そして8点の土錐が出土している。これらは4層を中心に出土したものであるが、縄文遺物はみられなかった。ただし、人為層ともいえる上位層の1～3層（部分的に暗褐色土が嵌入）では、数点の石器剥片が出上したのであった（第2表）。また遺構は、4層と5層の暗褐色土層の層界から柱穴状のピットが下位層に嵌入して検出されている（第5図）が、遺物との共伴からみて、それらは中世前半期のものと想定される。そして5層には15cm内外の角砾がみられたことから、また山裾という立地から判断して、本層は山土の堆積層と思われる層位であろう。6層は、粘質性の混じった砂性のもので遺物は出土しなかった。

つぎにB調査区は調査せず、C調査区の下半部（上流側）を掘削した。このうち1～2層は、平均値的にみると、層厚差があつて搅乱を呈していた。また10cm内外の角砾が多量で、3層とした酸化鉄の含浸層は本調査区では捉えることができなかつたのである。つぎの4層は、層厚約40～60cmを測り、厚く堆積するが、60cm内外の角石を多量に含んでいた（図版3-2・3-3）。そして5層は、15cm内外の層厚を測って比較的の水平に堆積するものの、1点の縄文土器のみで、遺構は確認できなかつた。ただし本調査区では、嵌入したと思われる数10点の石器剥片が1～2層から出土している。そして下半（下流側）を掘削したD調査区は、基本的層序とおりに比較的の水平に堆積していたのである（第5図）。しかし4層は、凡そ20～40cmの層厚で、西半が薄く、山側の東半は厚く堆積し、角砾を含むな

第5図 土層図(1)



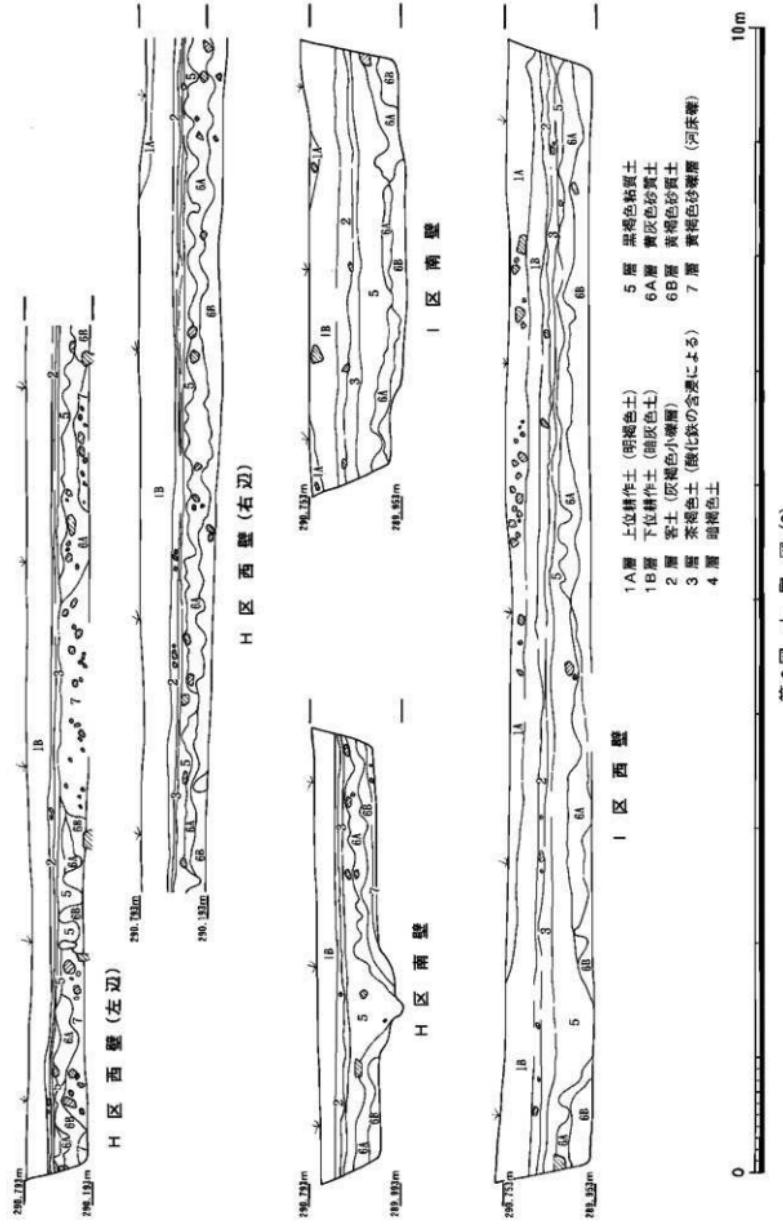
どバラつきがみられたのであった。また5層は15~30cmを測って厚浅差があり、下位部には50cm前後の山石が顯著であった。なお、遺構は4・5層の層界に検出しており、その遺構には土師器を伴うものもみられた。

E調査区は、屈折地点に設定した調査区で、そのうち上半部を掘削した（第4図）。本調査区は基本的層序としたとおりで、比較的水平で安定した堆積状況であった（第5図）。このうち茶褐色土の3層は、実質的には4層と類似したもので、2点の上師器が出土している。また4層は20~25cmの層厚をもち、上下の層界面は比較的水平で、しかも顯著な礫も見当たらなかった。そして、5層は20~30cmの層厚であって、下位の層界は波状に乱調的であり、そして40cm前後の山石が数石点在していたのである（第10図）。なお、出土物は5層を中心に縄文遺物がみられたが、とくに1~2層における数10点の出土数は、攪乱などによって搬入したものと捉られる。そして中世期の遺構と考えられるピット状のものが、4・5層との層界面に検出されている（第10図）。

F調査区は、区域の上流側に設けたもの（第4図）。本調査区の層序は、基本としたものと同じであったが、とくに西半部において人為による深い掘削が行われたらしく、攪乱を呈していたのである（第5図）。このうち遺物包含層と捉えられる4層は、20~30cmを測って比較的厚層であったものの、厚浅差がみられ一様ではなかった。また土質はやや軟性を呈し、礫も少なく掘り易かった。つぎの5層は層厚15~20cmばかりを測る層位で、やや下位の層界は波状的に凹凸する。そして下位を中心に遺構に伴うと思われる数個の河原石がみられたが、縄文期に伴う1基の土坑とともに、その具体的な位置付けはできなかったのである。

G調査区は、山地からの崩壊土と捉えられる4層の暗褐色土（3層の酸化鉄の含浸した層位と類似したものであるが）は堆積していないかったが、これは山側からやや離れているという地形的な立地が影響しているものと考えられる。また耕作十においても、とくに西半部では2重構造（やや色調で差異があるものの、同一的な耕作十）がみられるなど、前述の調査区とは層序が異なっていた。そして5層とする黒褐色土は、局部的に陥ち込んだり、また部分的に尖滅するなど一意的ではなかったのである（第5図・図版3-4）。これは水田の再造成による深い削平が行われた結果であり、したがって縄文遺物が1・2層の上位部に多量に出土するという逆転現象が物語っていることからも窺える（第1表）。なお、本調査区の上位層においては擾乱的要素がみられたとはい、5層には遺構に伴うと想定できる配石が、また6層との層界にはその土坑が検出されたのであった（第11図・図版5-2）。

つぎのH調査区は、G調査区の上半部に連結して掘削したもので、幅4m、長さ15mのものである（第4図）。層序は、G調査区と同傾向の層順であったが、むしろ部分的には電柱が建てられた形跡がみられるなど、攪乱においては度が過ぎている感もあった。そうした状況の中で、1層の耕作上は20~30cmを測り、他の調査区に比べて特に厚層であった。また本層には縄文遺物も多く出土しており、削平などで搬入されたものと思われた。また酸化鉄の含浸による茶褐色土（実質的には暗褐色土）とした3層にも出土していることから、2層を含めた上位層に、多少の影響が及んでいたものと捉えられる（第2表）。そして5層は、陥ち込んだ厚層部分もみられたが、尖滅がみられたり全体では浅層で、上位部にも多少の削平的な人為があったものではないかと理解したのであった。しかし、これらは特に西半側での状況であり、その反対の東半側では余り顯著ではなかったのである。その成因は、



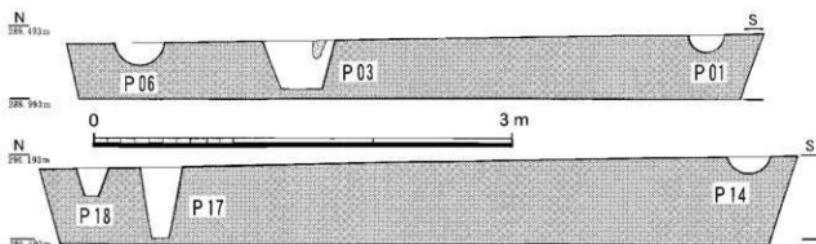
第6図 土層図(2)

地山である6層の上位面が山寄りに当たる東側に向かって陥ち込んでいたことによっていると思われ、つまりそこは旧河道であった形跡が認められたのである。そのため上位部において、とくに西側部分の上位部が削られたものと考えられる。なお遺構は、5層から地山と考えられる6層に掘り込まれた配石を伴う数基の土坑・ピットが検出されている（第11図・図版5-5）。

I調査区は、南西端に設けた幅4m、長さ10mのもの（第4図）。上位部から1層、そして下位に向かって7層へと順に堆積していたが、ただ明確な4層とした暗褐色土は把握することができなかつた。このうち1層は、色調の上からA・Bとに分層しているが、これは新田の違いから生じたものと思われ、実質的には同一の耕作土と想定されるものである。おそらく水田の再造成（マチダオシ）によって形成されたものと思われ、そして本層には搬入されたものと捉えられる縄文遺物も比較的採集されたのであった（第2表）。そして2層は水田の客土で、層厚5~8cmを測り、疎を多く含んでいた。つぎの3層は、酸化鉄が含浸した茶褐色土で、4層（山土）を欠落しているが、土質的には暗褐色土系と捉えられるものであった。層厚は5~10cmを測り、包含したものは明確にいえないが、縄文遺物が混在していたのである。そして5層は、下流にあたる北側に深く堆積するという傾向がみられた。また遺構は6層との境界にピットを中心とした数穴が検出され、一方これらに伴うと想定される縄文遺物も比較的出土した。

遺物・遺構の文化層 以上のことから、遺物が含まれた層位は、凡そ1~2層のもの（1期）、3層・4層上位のもの（2期）、そして4層下位（A~F調査区）~5層（3期）との3つに分けられると想定できる。

これらのうちの1~2層のものには、主に陶磁器・金属類などの近世以降のものが出土し、3層・4層上位のものには土師器・瓦器類がみられたのである。また4層下位（A~F調査区）から5層には特に土器や石器などの縄文遺物が、そして6層との境界には遺構が検出された（第1表）。ただしこれは出土傾向で、中には遺物の取り上げなどにおいて、多少の層位の読み違いも含んでいるものもあると思われる。これは酸化鉄が含浸したものを色調上から3層としたものであるが、土質的には4層に類似するものであったり、また地区によっては層位の厚浅差から採り上げにおいて間違いを生じている、かも知れないと考えている。



第7図 柱穴の陥入状況図

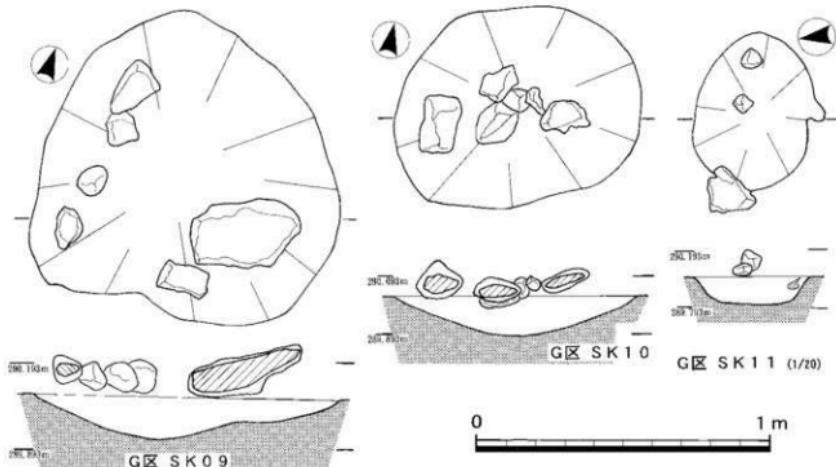
3. 遺構

はじめに 前述したように、とくに出土遺物からみて本遺跡は、大別して3つ文化期があったものと想定される。しかし遺構においては、2期しか把握することができなかった。しかもこのうち中世前半のものとするものは、A～E調査区という北半部に限られていたのである。したがって5層を中心とした縄文期のものということになるが、それも貫通としない“部分掘り”方式であったため、各調査区との連関性は明らかにすらることができなかつたのであった。

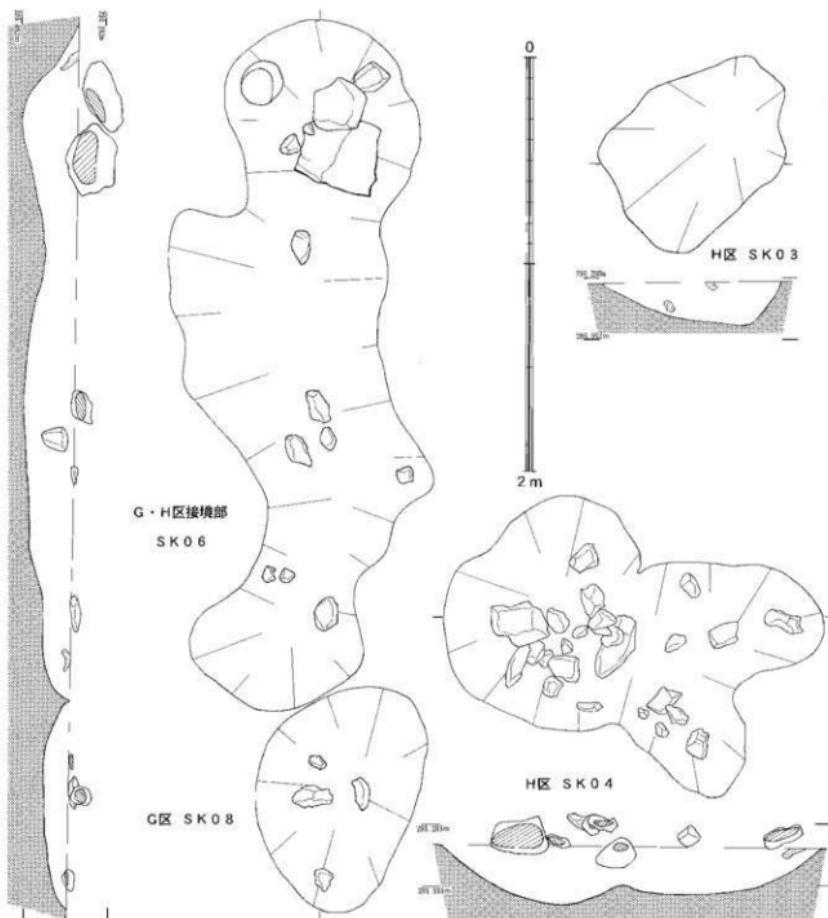
各調査区の遺構 このうちA調査区では、柱穴状のビットが7穴検出された(第10図)。これらは4層と5層の層界面に表出したもので、構築層は4層であったと想定できるものである(第5図)。このうちP02・P03は径50cm前後、P06は凡そ35cmを測り、他調査区に比べて柱穴としては大型のものであった。また他の4穴は20～30cmを測る小振りのものであるが、上位部に構築部があったことを考えると、原体そのものは前者並のものであった可能性もある。これらの7穴は、いずれも垂直的に6層まで嵌入しており、また共伴遺物はなかったものの4層の包含遺物からみて、これは中世前半期の掘立柱跡であったものと考えられる。

C調査区では、いずれの文化期の遺構は検出できなかつた(図版3-3)。遺物においても、1～2層は別として数点のみで顕著ではなかつたのである(第2表)。

D調査区では、4層と5層との層界面に柱穴状のビットが7穴検出できた(第10図・図版6-1)。これらは遺構の構築部が4層のものであることから、中世前半の文化期のものであったと想定できる。また本層には土師器や鉄滓が出土しており、P07では土師器1点を伴つたのである(第1表)。これらは凡そ径20cm前後のものであつて、連穴するもの、また斜傾するものがみられたが、柱列などからは、その形態などを把握することができなかつた。なお、下層の5層では数点の縄文遺物を包含して



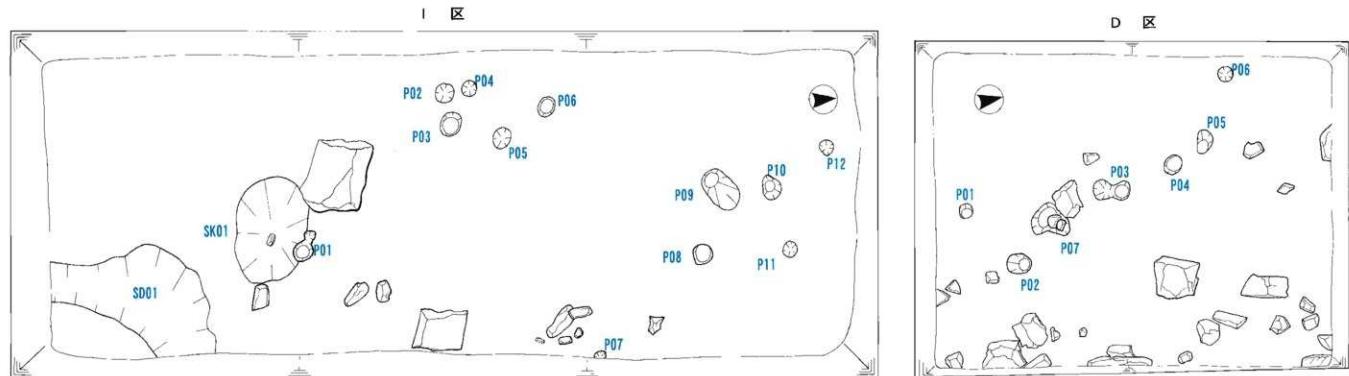
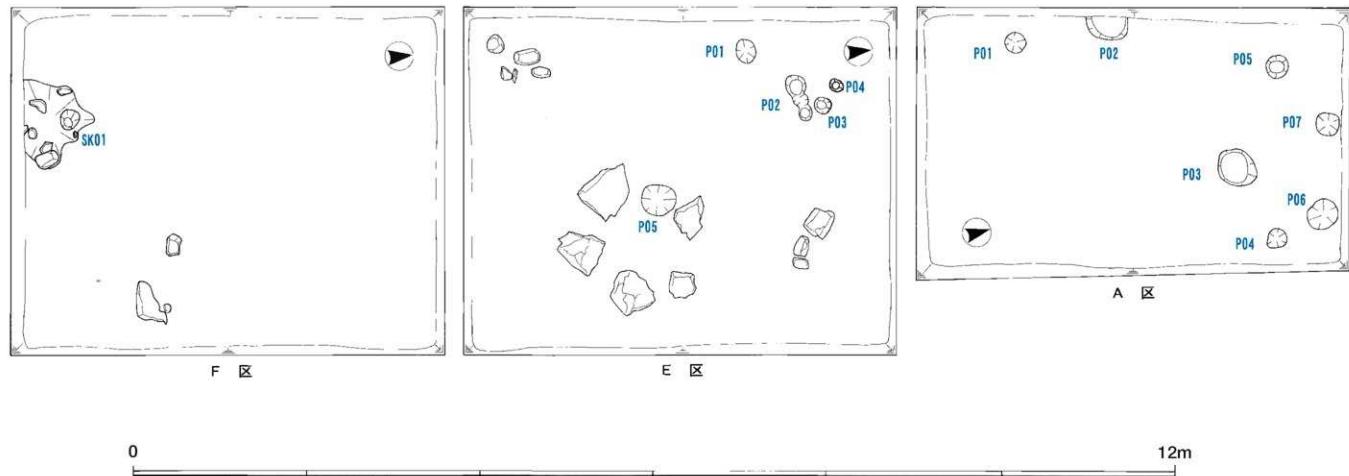
第8図 土坑の陥入状況図(1)



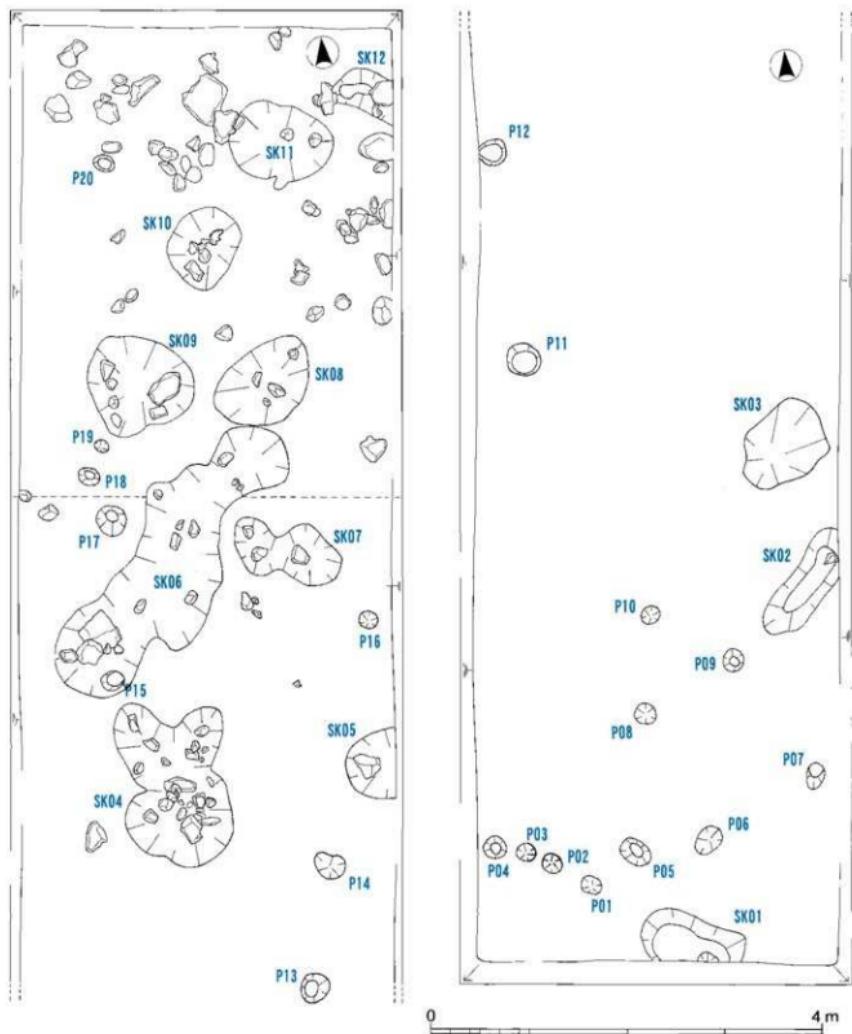
第9図 土坑の陥入状況図(2)

いたが、遺構は伴わなかったのである。

E調査区では、4層上位を中心にして土師器が出土し、そしてその下位から5層にかけて縄文遺物が出土し、その数量は凡そ2分する。しかし遺構は2期と想定した文化期のものと思われる柱穴はみられたが、縄文期と捉えられるものは検出されなかった(第10図・第1表・図版6-2)。その遺構は連穴を含んだ5基で、形跡的には柱穴と捉えられるものである。いずれも垂直に建てられたもので、P05としたものは径約40cmを測り、また周辺部には径50cm前後の山石が存在したのである。他にも30cm前後の河原石が認められたが、遺構に伴うものかは確かではない。ただし他層においては、こうし



第10図 各区の指示・遺構図



第11図 G・H区の指示・遺構図

た顕著なものがみられなかつたので、共伴した可能性も考えられないでもないが、いずれにしても、
狹掘という全体像が把握できない現状では明らかにできなかつたのであつた。

F調査区には、SK01とした七坑が5層と6層との層界に検出（1基）された（図版6-3）。これらは南壁脇に表出したものであるため、その坑形は明らかではない。そしてその坑中下位面には柱穴状

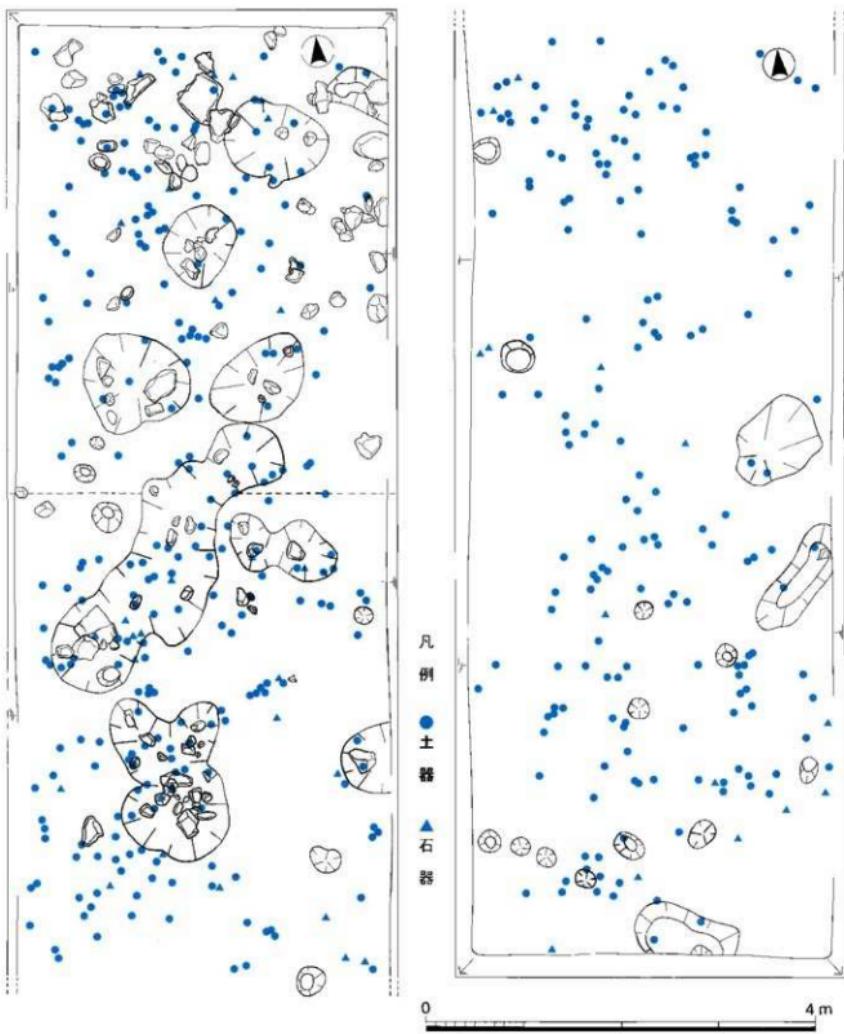
第1表 造構計測表

区名	造構NO.	直径 cm	長径 cm	深さ cm	表面標高 m	摘要	区名	造構NO.	直径 cm	長径 cm	深さ cm	表面標高 m	摘要
A区	P 0 1	23.0	26.0	13.0	289.453		G区	P 1 4	22.0	35.0	12.0	290.193	
	P 0 2	—	48.0	21.0	289.453			P 1 5	20.0	23.0	33.0	290.173	
	P 0 3	43.0	50.0	54.0	289.423			P 1 6	18.0	19.0	16.5	290.148	
	P 0 4	23.0	26.0	10.0	289.403	2期に伴うもの		P 1 7	31.0	34.0	30.5	290.098	
	P 0 5	25.0	27.0	15.0	289.463			P 1 8	20.0	23.0	24.0	290.093	
	P 0 6	32.0	36.0	9.0	289.393			P 1 9	14.0	16.0	15.0	290.093	
	P 0 7	27.0	29.0	14.0	289.443			P 2 0	19.0	20.0	15.0	289.943	
D区	P 0 1	15.0	17.0	14.5	289.828		H区	S K 0 1	—	110.0	31.0	290.268	
	P 0 2	24.0	28.0	20.0	289.863			S K 0 2	40.0	—	18.0	290.273	剥片1点
	P 0 3	25.0	43.0	13.5	289.868			S K 0 3	70.0	100.0	17.5	290.268	縄文土器2点
	P 0 4	20.0	25.0	20.5	289.798	2期に伴うもの		S K 0 4	81.0	180.0	25.0	290.173	中津式土器1点
	P 0 5	18.0	28.0	3.0	289.643			S K 0 5	71.0	—	16.5	290.168	
	P 0 6	17.0	18.0	2.0	289.683			S K 0 6	78.0	336.0	—	290.143	縄文土器2点
	P 0 7	27.0	45.0	19.0	289.863	土師器I点		S K 0 7	37.0	118.0	16.0	290.143	中津式土器1点
E区	P 0 1	23.0	30.0	7.5	289.888		I区	S K 0 8	71.0	110.0	11.0	290.093	
	P 0 2	22.0	56.0	32.0	289.854			S K 0 9	86.0	112.0	12.0	290.073	石錐1点
	P 0 3	19.0	21.0	22.5	289.848			S K 1 0	54.0	82.0	10.0	290.063	
	P 0 4	15.0	17.0	12.0	289.863			S K 1 1	78.0	103.0	20.0	290.013	縄文土器I点
	P 0 5	35.0	41.0	10.0	289.863			S K 1 2	40.0	—	19.0	290.643	
F区	S K 0 1	81.0	—	42.0	289.843		K区	P 0 1	13.0	38.0	27.0	289.923	
	P 0 1	18.0	28.0	10.0	290.283			P 0 2	21.0	23.0	5.0	290.643	
	P 0 2	18.0	26.0	13.0	290.283			P 0 3	28.0	31.0	13.0	290.033	
	P 0 3	17.5	19.0	10.5	290.288			P 0 4	17.0	18.0	6.0	290.043	
	P 0 4	23.0	26.0	22.0	290.313			P 0 5	21.0	26.0	10.5	290.028	
	P 0 5	26.0	34.0	10.0	290.273			P 0 6	20.0	26.0	11.0	290.063	
	P 0 6	22.0	31.0	20.5	290.268			P 0 7	—	14.0	7.0	289.913	
H区	P 0 7	17.0	28.0	20.5	290.278		K区	P 0 8	23.0	24.0	19.5	289.960	
	P 0 8	21.0	22.0	13.0	290.273			P 0 9	32.0	52.0	18.0	290.013	黒曜石(白)1点
	P 0 9	21.0	24.0	17.5	290.278			P 1 0	20.0	30.0	17.0	290.023	
	P 1 0	19.0	20.0	16.0	290.283			P 1 1	18.0	20.0	12.5	289.988	
	P 1 1	34.0	36.0	43.5	290.278			P 1 2	15.0	18.0	8.0	290.063	
I区	P 1 2	24.0	30.0	25.0	290.273		K区	S K 0 1	82.0	130.0	11.0	289.943	
	P 1 3	29.0	33.0	20.0	290.233			S D 0 1	80.0	—	25.0	289.963	

のピットも相伴しており、また径20~25cmを測る河原石の6石も検出されたのである。本調査区におけるこの造構は、どういった性格のものであるかについては判然としないが、後述するG・H調査区では同形態のものが検出されていることから、その土坑に伴う配石と考えられる。また長径は1m余りのものと想像され、表面積（5・6層との層界）から深さ42cmを測るものであるものの、配石はその坑上を中心に配されていたことから、原体の深さは、より高かったものと想定される。

また縄文遺物の出土状況からみて（第2表）、それは恐らく4層下位、あるいは5層上位部から陷入していたものと捉えられるものであろう。

G調査区とH調査区のものは統括としたので、G・H調査区として括して概要しておくことにする。その本調査区ではPと略号した柱穴状のもの20穴、そして上坑状のもの12基が検出された（第11図・第1表・図版6-5）。これらは5層と6層との層界面に検出したもので、遺物との包含・共伴（SK04・SK07）性からみて、縄文後期前葉のものであったと想定されるものである。そして分布状況においては、凡そ柱穴状のものが南半部に、土坑状のものが北半部に偏在するという傾向がみられ



第12図 遺物分布状況図 (G・H区)

た。さらに同じ土坑でも、北半部のものは数個の配石を伴うものの、南半部の3基の土坑ではそれが顕著ではなかったのである。

このうち柱穴状のビットは、径20~30cmを測るもので(第1表)、陥入端が鋭角的になっているものは深く、円み滞びたものは浅いという傾向がみられた。そして前者は径も広く、その反対に後者は

狭かったのである（第7図・第11図）。これは掘削の仕方にもよると思われるが、そこには陥入差による遺存状況も影響しているものと考えられる。そして南半部に顕在するこれらの柱穴は、後述する配石遺構と、どのように関わるものなのか、それとも別機能のものであるかは明らかにすることができなかった。しかし同地点のSK01～SK03の配石を伴わない土坑遺構からみると、後者に関わるものと捉えられそうである。

また上坑は、5・6層との層界面に表出したもの12基を捉えることができたが、これにはSK04やSK06・SK07のように、その形状から重なり合っているものも含んでいるので、16基以上は存在していたものと考えられる。ただし同一層内ということもあって、それらの切り合い関係を捉えることができなかつたのである。そして特に北辺部の土坑には数個の河原石を用いた配石を伴っており、それらは上坑の上部を中心に配されたといった形態のものであった（第8図・第9図・図版5-3）。したがって、その配石遺構の構築部は、少なくとも5層もしくは、それ以上の層位（もしくは3層）から成っていたと想定される。また他にも上坑をもたず配石状のみといった、まとまりをもった石群がみられるものの、同一層内ということもあって見逃したものと思われるが、それらも同形態の遺構であった可能性が強いと考えられる（第11図・図版5-1）。

これらのことから、層界に検出された遺構のみをもって捉えることはできないが、坑形あるいは配石状況からみて、SK08～SK11などが原態に近いものではないかと思われる。それらは凡そ短径70cm、長径110cm前後の楕円形で、坑底部は緩やかな椀状を成していた（第8図・第9図・図版6-5）。また遺物は、坑上部辺には散漫していたものの（第12図）、共伴遺物はSK04・SK07とに僅か中津系の土器数点といった程度にとどまったのである（第1表）。なお、そのほか骨片・炭化物といった土器・石器以外のものは本層では出土していないく、また顯著な立石も検出されなかつたのであった。

さて次に南端部に設けたI調査区は、柱穴状のビットが12穴、SKとした上坑が1基、そして溝状のSDとしたものの1基が検出できた（第10図・第1表・図版6-8）。このうち12穴の柱穴状のものは、H調査区寄りの北半部に検出され、連穴または斜傾ものを除くと、その径20cm前後のものから30cm前後のものであった。そして表出面は5層と6層との層界部で、その6層に陥入する深さはP01やP08以外はいずれも20cm以内と浅い（第1表）。そして、これら柱穴には5層の黒褐色土が嵌入していたことから、3期とした縄文遺構であることは確かであるが、しかし柱列などからみても統一性はなく、機能的性格については捉えることができなかつた。また同時期と想定できるSK01、そしてSD01の遺構についても、今調査が範囲の限られた狭掘であったということもあって、明らかにすることはできなかつたのである。

（渡辺友千代）

〔註1〕 匹見町教育委員会「石ヶ坪遺跡」1990年

第4章 出土遺物

第1節 はじめに

本調査における出土遺物として捉えたものは、総数2379点であった（第2表）。ただし出土遺物といつても絶対実測に係るものではなく、後世の人为的な層位である1・2層、あるいは擾乱層などのものについては、ただ採集するといった程度にとどめた。また、それ以外のもにも中には廃土から取り上げたものがあったり、人为による石器剥片と捉えているものが、そうではないなどの間違いもあると思われる。そして炭化物、あるいは人为によるか否かが判然としない（礫片など）ものは採集しているものの、数的に押さえていない。

第2節 出土遺物の種類と傾向

本遺跡での出土遺物を多い順にみていくと、1165点の縄文上器（48.9%）、325点の乳白色の黒曜石（13.7%）、312点の安山岩系の石器剥片（13.1%）、162点の上師器（6.8%）、126点の陶磁器類（5.3%）、99点の滑石混入土器（4.2%）、52点の損欠を含めた打製石斧（2.2%）、42点の石錘（1.77%）、29点の金属類（1.2%）、17点の土錘（0.8%）とつづく（第2表）。そのほか黒色の黒曜石、チャートなどの石材とともに、また石錘（9点）・石錐・スクレイバーなどの利器類（石核も加えている）としたものが出土しているものの、それらは少量であったのである。

これらのうち特に上器や石器類などの縄文遺物は、5層としている黒褐色土に出土し、またD・E・F調査区の北半部では暗褐色土の4層下位以下にも、若干確認されたのであった。一方、南半部のG調査区以下のI調査区までは、5層を中心特に多量に出土したが、これらが括縄文時代のものといつても、厳密には時期的さらに3期に仕別できるものである。それは阿高・並木式という滑石混入土器などの中期に位置付けられる文化期のもの、そして後期前半の中津系の文化期、さらに極めて少量であるものの、岩田4類・突帯文土器などの晩期に位置付けられる文化期のものなのである（第13～15図・図版7・8）。G～I調査区において、とくに5層を中心に出土しているものの（第2表）、中には3層の茶褐色土で若干捉えられたものもあり、それらは晩期のものであったという傾向がみられた（第15図・図版8-2）。ただし、5層という同一層内に出土した滑石混入土器系のものと、中津系の土器とは層位的に捉えることはできなかったのである。

第3節 実測遺物

1. 縄文実測土器

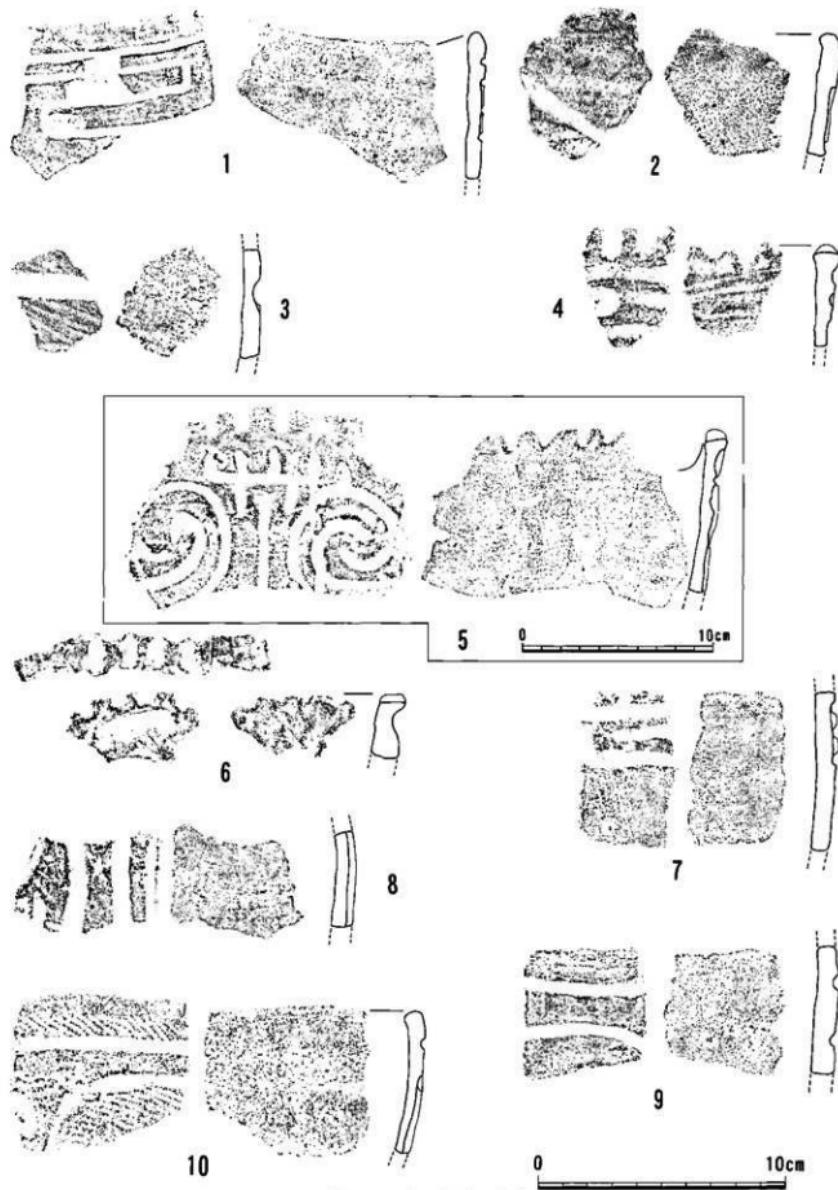
本遺跡を特徴付けると想定されるものを中心抽出し、以下順を追って説明していくことにする（第13～15図・図版7・8）。

1～4は、いずれもH調査区の5層から出土したもので、中津系の範疇、もしくはそれ以外のもので、明確な形式名がないもの。このうち1は、波状の口縁部である。内外面とも条痕で調整し、外面

第2表 出土遺物集計表

出土地 名	測定 番号	出土遺物														合計									
		白 石 墨 石 器	石 器																						
A 区	1~2層	1													7	1	10								
	2~3層	2													2	7	1	12							
	3層															4	1	7	12						
	4層	2													7			4	13						
	表層															1			1						
C 区	1~2層	8	16	1	2										2	26	5		80						
	4層上面	2																	2						
	4層	3													1	2	1		9						
	4層下面														2	2	2		6						
	5層	1																	1						
D 区	1~2層	3	5	1	1	1									3				14						
	3層														1	9			11						
	4層	6	2	2			1								1	14			29						
	4層下面	6	3																9						
	5層	4	2				1								2				9						
E 区	表層																	多量	-						
	地盤-P97														1				1						
	1~2層	16	12	1	1	3	1								2	2	10	3	2	1	54				
	3層														2		2			4					
	4層上面														21					21					
F 区	4層	9				1									5	4			1	29					
	5層	3					2								17	3				25					
	1~2層	2	5			2									11	1		1	2		24				
	2層														2					2					
	2~3層	6	5	1											1	9				26					
G 区	3~4層	1	5			1									3					10					
	4層上面														3					3					
	4層	7	5	1		1									1	13	12			40					
	4層下面														3	6				9					
	1~2層	8	15	1	3	1	6								127	1	12	1	2	1	178				
H 区	3層	5	8												29		10	1			51				
	5層	5	1			1	5								1	141	9			164					
	表層	2													1	3	303			9					
	1~2層	37	37	1	4	2	2	1	1	2	17	4(1)			49	4		1		162					
	3層	32	66	2	1	3	1	4	1		1	82	18	12		2	1			198					
I 区	5層	13	14	1				6	3		2	268	24(8)						1	329					
	表層	1									1	3								6					
	Hベルト	1	4									14								19					
	GHベルト	3			2							2	4	23			2			36					
	SK02	1																		1					
J 区	SK03											2								2					
	SK04											1								1					
	SK06											2								2					
	SK07											1								1					
	SK09					1														1					
K 区	SK11											1								1					
	1~2層	15	24	1	5	1	2	1				35	3(1)	3		21	2			113					
	3層	28	23	1	1	1	4					87	6	3		2				136					
	5層	82	71	2	6	4	12	1			4	317	22(4)						少量	372					
	北壁											2								2					
M 区	高七		1					1				1								3					
	地盤-P99		1																	1					
合計		312	325	11	19	23	7	52	9	1	2	13	1185	99(18)	162	1	1	126	29	1	4	17	-	-	2379

※括弧は変式土器、また利器とした項目にはスケレイバーなどの2次加工した石器の点数を示している



第13図 土器実測図(1)

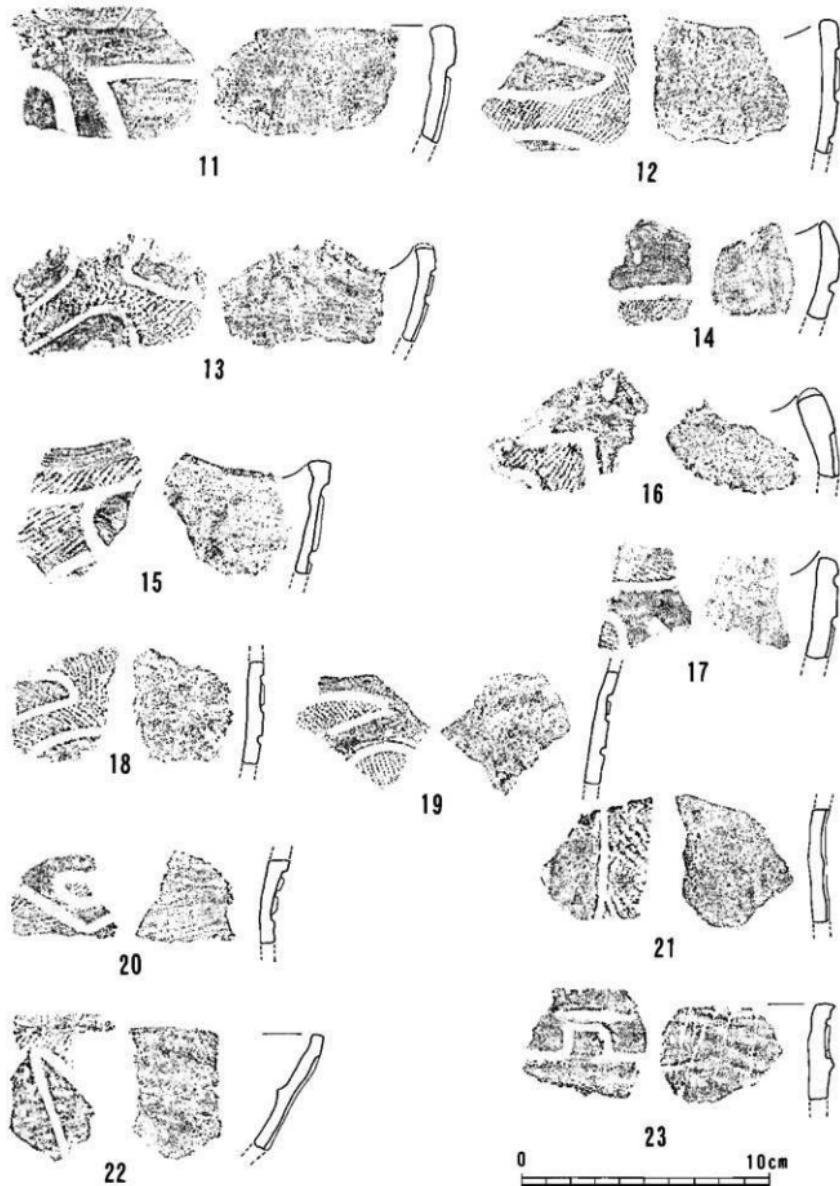
には棒状具による幅細いコの字形やクランク状の文様を施した後、内外面ともナデ仕上げとする。器肉は比較的薄く、堅緻な焼成である。色調は灰褐色で、胎土には砂粒を含む。おそらく施文・調整などからみて、小池原上層式に後続するものであろうと考える。2・3は、阿高系と思われるII頭部である。両者とも内外面を条痕調整とし、外面に凹線を施した後、ナデ仕上げ。両者とも器内は厚手で、灰色を呈するもの。4は、口縁に凹状の刻みを施した口縁部である。内外面とも条痕調整で、外面には横方向の細い凹線を施した後、強いナデ仕上げている。口端部は刻み押圧で張り出しが、頭部に向かって器肉は薄い。色調は灰色を呈し、胎土には砂粒を含んでいて堅緻とはいえない。細片があるので判然としないが、中期末に位置付けられている西和田式の特徴を見い出せないではないと考える。

5～9は滑石混入土器で、このうち7はI調査区（5層）、そのほかH調査区の5層から出土したものである。うち5は、口径約26cmを測る阿高式土器で、突起部をもった口縁部である。内外面ともケズリ調整とし、外面には棒状施文具による短い縦方向、そして右・左まわりの2つの渦巻を凹線で施文する。そしてその渦巻状の端部は、？記号をした蔽文ふう。また突起部には棒状具による刻みをつけている。器肉はやや厚手、色調は青白一褐色を呈する。施文形態からみると、黒橋貝塚でいう黒橋V期^[註1]のものに酷似しており、それらから時期は中期末に位置付けられるものであろう。6は、阿高式上器の鋸状をした突起部で、その外面には横方向の短い凹線を施文したもの。器肉は厚く、橙褐色を呈する。7～9は、いずれもケズリ調整で、縦・横方向に凹線を施し、色調は橙～赤褐色を呈したもの。うち7は、凹線がL字状に施文する。なお、細片ではあるが、ほかに並木式土器が数点出土している。

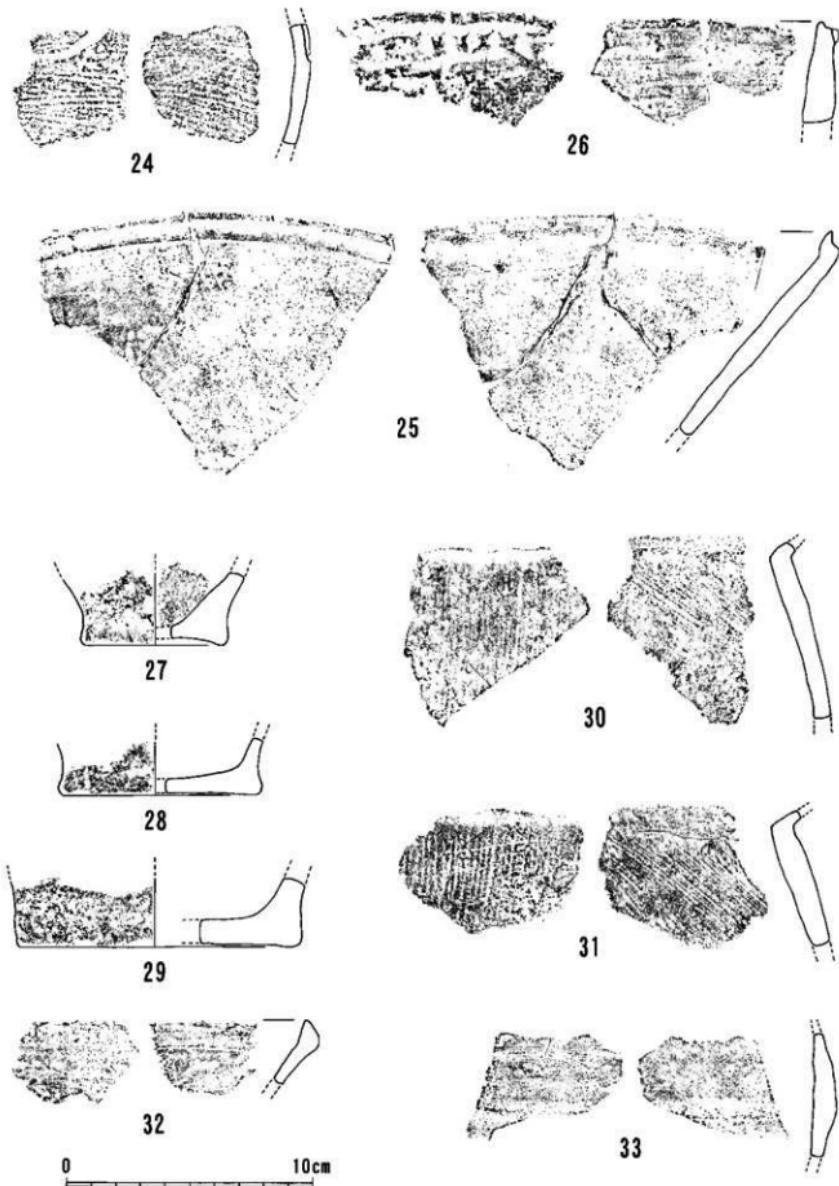
10～21は、中津式上器といえるもので、I調査区で出土したものもある（13・18）が、他はすべてG・H調査区の5層に出土したものである。このうち10・11は半部の口縁部で、両者ともナデで、前者の外面には左撚りの縄文が施されるが、後者にはない。いずれも外面には幅広く、深い直・曲線を描き、前者は灰色、後者は暗褐色を呈する。12は、波状口縁部。内部は精緻なナデで、外面には浅く幅広い凹ふうの曲線文を施し、沈線の棒内は磨消し、また棒外はLr/rの縄文で飾る。胎土、焼成とも極めて精緻であり、色調は暗褐色である。

13～17は、いずれも波状部辺のもの。このうち13は波頭部で、条痕調整。外面には2本の曲線を施し、その沈線は力が不均一で深浅差がみられる。また区間にLRの縄文が施されているが、その撚りが2本のものが使われている。器肉はやや厚く、色調は黄灰色を呈している。15は、14に比べて薄手で、沈線は凹状なして幅広である。外面には弧状線を連続的に施した様子が窺われ、その沈線状の施文は深い。焼成、胎土とも精良であり、色調は淡橙色である。16は、波頭部で、その波頭端部には棒状具による刻みが付けられたもの。器肉はやや厚く、施文は粗っぽい。17は、器肉は厚く、胎土や焼成は堅緻である。

18～21は、口頭部片。このうち18・19は、外面の模様を先端部の丸みある施文具で、曲線をもって区画ふうに描くが、その転換部は尖る。両者ともやや薄手で、前者は橙色、後者は灰色を呈する。20は、条痕調整後ナデのもの。外面には直・曲線の沈線を施し、その間隔はやや狭く、そして施文具の先端部分が粗かったためか、沈線がザラザラしている。中津式として捉えているが、福川KII式期のものかも知れない。21は、条痕調整の後、ナデで仕上げたもの。縄文帶と沈線間にやや間隔がある



第14図 土器実測図 (2)



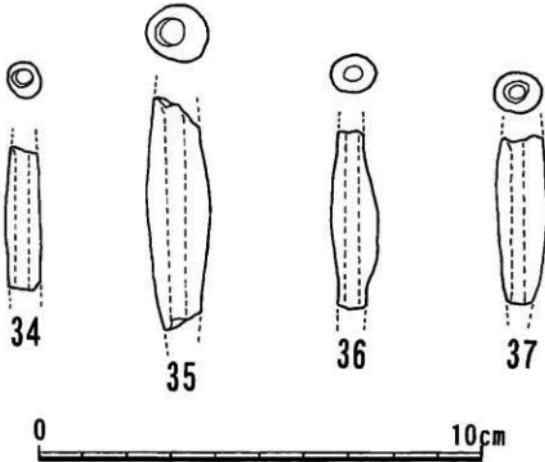
第15図 土器実測図 (3)

ようを感じられる。色調は内面が茶褐色、外面は黒褐色である。

22~24は、中津式上器とは明確にいえないもの、また福田KII式あるいは縁帶文系ではないかと思われるもの。このうち22は、外傾する浅鉢系のII縁部と思われるもので、内外面を条痕で調整した後、ナデとする。また内面側にはくの字形の稜がみられ、外面のII唇には縄文が施されている。沈線はやや広めで、3本の直・曲線をもって木の葉状の楕円形を描く。内面の色調は赤褐色、また外面は暗褐色を呈し、堅密な焼成である。おそらく福田KII式、またはこれに後続するものに属するものであろう。23は、内外面とも精緻なナデを施し、外面の口縁部には比較的強い沈線で凸の字状に施文したもの。そしてその下段には、頂部が丸み滲る横走の凸帯を貼り付けている。器肉はやや厚く、胎土は緻密であるものの、焼成は良好とはいえない。内外面とも部分的に焼が付着し、色調は灰褐色である。施文形態などからは中津系ともいえないでもないが、器形的には縁帶文系に属するものかも知れない。24は、頸胴部で、内外面とも条痕調整が顕著なもの。やや厚手で、外面に曲線文が僅かにみられる。胎土には砂粒を含み、焼成は余り良くなく軟質で、また色調は黄褐色を呈している。中津式、もしくは後続するものかも知れない。

25~26は、晩期に位置付けられるもので、本調査では僅かな数景であった。このうち前者は、丘調査区の3層に出土した精製浅鉢の口縁部である。内外面ともヘラ具で精緻に磨き上げられ、灰褐色を呈する。器肉はやや厚手で、直線的に広く開いて立ち上がり、II縁部は短くクランクする。口縁の形態から、おそらく御領式の影響を受けた岩田4類といえるものであろう。後者の26は、突帯文土器の口縁部。II端部は端的に細まり、やや嘴状を呈する。内面のII縁部には凸帯が貼り付けられ、その頂部は鋭利に刻み込まれている。内外面とも粗いナデで、やや厚手。胎土には粗い砂粒を含み、けして焼成は良いとはいえない。

27~29は底部で、このうち27は、底部径が狭く、その外面は上げ底ふうの凹字形である。内外面とも条痕で調整した後、ナデを施している。形態的にみて、おそらく中津式系のものであろう。28は、前掲よりは立ち上がり部分の器肉は薄く、また底部の外面はベタ底といえるもの。そして29は、径が広く、器肉もやや厚く、僅か上げ底ふうである。形態的には27→29→28という変遷が辿られ、おそらく28・29は中津式以降のものに伴うものであろうと考える。

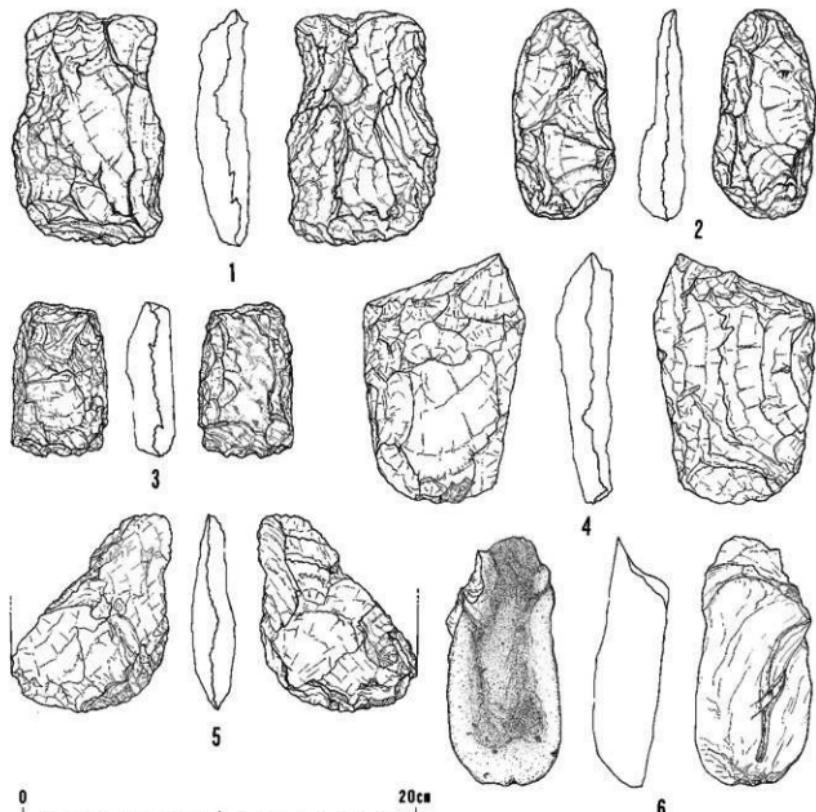


第16図 土錐実測図

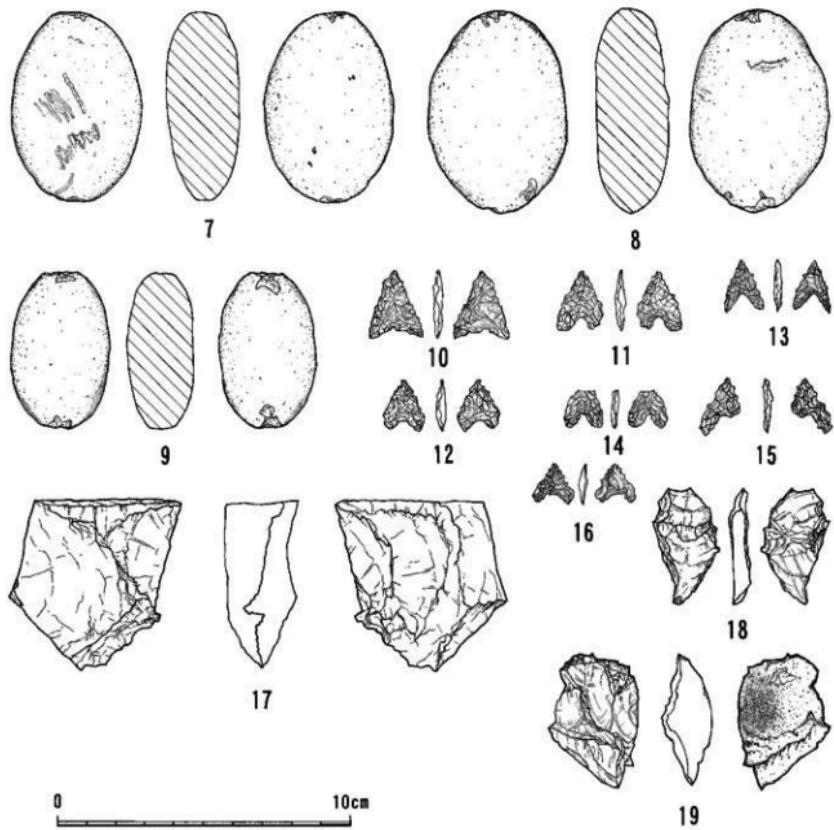
2. その他の実測土器・土錘（第15・16図・図版7）

30・31は上部器、32・33は瓦質土器である。このうち30・31は、両者ともA調査区に出土したもので、1固体であるものの、出土地点に差があった。内外面ともハケメとし、内面は横・斜め方向、また外面は縦方向に調整する。色調は橙褐色を呈し、外面には煤が付着する。32は、口縁部外面がくの字形に短く屈折して稜をついているが、内面側は顯著ではなく、僅か内傾するといった程度のみ。胎土に砂粒を含み、その移動痕もみられるなど、調整は粗い。33は、内面は1章にナデを施しているが、外面は均一性がなく、器面にはヘラ具状の調整の稟がのこり凹凸する。また頸部にはハケメ調整が部分的にのこり、焼成は良好であるものの、成形は全体に粗い。両者とも灰褐色を呈している。

34～37は土錘で、このうち34はC調査区、他の3つはA調査区の4層に出土したもの。うち34は、両端を損失し、重さは3.7g。中央部と両端との径は余り差はない。色調は橙褐色を呈して、其器質



第17図 石器実測図（1）



第18図 石器実測図(2)

で、ヘラ具で調整したもの。35は、中央部の最大径1.6cm、孔穴は0.6cmを測り、両端を損欠し、その重さは10.6g。棗形をし、土師質のもの。36は、重さ4.6gを測る完形品で、両辺部は野球バットのように窄まる。中央部の最大径は1.1cm、孔穴は0.3cmと小さい。37は、片方を1/3を損欠し、重さ5.8gを測るもの。中央部の最大径は1.2cmで、孔穴は0.3~0.4cmを測り、同一の穿孔ではない。色調は橙色で、焼成は瓦質的である。

3. 実測石器(第17・18図・図版7)

1~5は打製石斧で、このうち3~5は損欠したもの。うち1はH調査区の5層から出土したもので、最大器長11.7cm、最大幅7.5cm、最大厚2.9cmを測り、腹面側にやや反る。基部以外の3縁辺から粗い剥離面で成形し、石材は玄武岩。2は、最大長10.2cm、最大幅5.2cm、最大厚2.2cmを測り、小振りな打製石斧である。石材は凝灰岩で、剥離切合い関係も明確ではなく、朽壊して灰色を呈する。3

は、I調査区の5層から出土したもので、刃部を損失し、石材は頁岩である。側面から比較的丁寧な調整を施し、成形する。腹面は石目に沿って自然分割されたものと思われ、無加工。刃部を欠いているため判然としないが、安山岩という石材質、精緻さからみて、刃部は磨製であった可能性もある。4は、I調査区の5層から出土した凝灰岩質のもの。基部を損失しているため、器長は明らかではないが、最大幅を8.3cmを測ることからみて、出土した打製石斧のうちでは大型に属するであったであろう。やや腹面側に反りがみられるが、成形は粗い。石材は凝灰岩で、器表はやや灰色を呈し、朽壊する。5は、I調査区の5層から出土したもので、石材は凝灰岩である。

6は、F調査区の5層に出土した石器の母岩で、石器の原料とするためのものであったであろう。加撃は多方向から行われたものではなく、石目に沿って単製したものと思われ、その背面には自然面をのこす。石材は凝灰岩で、重さ313.7gを測るもの。

7～9は、いずれもH調査区の5層に出土した石錐で、石材は花崗岩である。このうち7は99.6g、8は104.3g、9は55.6gを測り、自然石を用いて、いずれも長径側の両端を打ち欠いたもの。

10～16は石錐で、F調査区の5層に出土した10以外は、I調査区である。このうち10～12は安山岩質、13～15は乳白色の黒耀石、16はその黒色系のもの。うち10は、基部の抉入が小さく正三角形に近いもの。11は、美形とはいえないが、基部の抉入が円みをもって深い。13の乳白色の黒耀石製のものは、長三角形を成し、丁寧な細部調整が施されている。基部の抉入部は、鋭利な三角形を呈し、つくりは美形である。14は、切先部を欠くが、成形が全体的に丸っぽい。15は、抉入部は深いが、調整間隔に間があり、成形も粗い。16は、ズングリとした三角形を成し、また基部には均一な抉入調整が施されておらず、全体的に調整が粗い。

17～19は、石核あるいは石器剥片類である。このうち17は、H調査区に出土した石核と想定されるもの。上部面に石目であったと思われる自然面がみられ、該当面からの加撃、また下部方向からの数打の加撃があったことが捉えられる。石材は、玄武岩で重さは80.7g。18・19は、乳白色の黒耀石の剥片で、19の背面側には自然面がのこるもの。

(渡辺友千代)

[註1] 熊本県教育委員会『黒橋貝塚』1998年3月

第5章 ま　と　め

今調査は、県単道路改良工事に伴って実施されたものであるが、その予定地は盛土工法によって保存される公算が強かったため、一部を除いて遺跡の範囲確認という小規模の調査にとどめた。それは遺跡の保存という観点に立つならば、最良な方策であるといわなければならぬが、その一方で、遺跡のもつ意義または性格を知る上からは、今回の狭掘では全体像を浮き彫りにすることはできなかつたのである。ただし山裾という地点であったとはいえ、該当予定地に遺跡の広がりが確認されたこと、また1990年に調査された折、未調査に終えた配石遺構が凡そ如何なるものであったかなど、それなりに成果があったものと確信している。

以下、本調査で若干の気付いた点、あるいは問題点などを指摘し、まとめとしておきたいと思う。さて本遺跡における文化期は、出土遺物などから大別して3つの文化期から形成されていたと考えられ、それは縄文・中世前半・近世のものだったということができる。このうち近世期のものは、人為層ともいえる1・2層に出土した陶器類であって、遺構も確認されず、全体的にみて意義が薄いと判断し、今調査では特にとり扱わなかった。そして次の中世前半期のものとするものは、偏在した北半部の4層を中心に、一部遺構を伴って検出できたのである。これらの中にはやや古い時期におさえることができるハケメ調整のものもみられるが、須恵器もほとんどみられず、また土師器は口辺部がくの字状を呈する形態のものも散見されることなどから、凡そ10世紀それ以降のものではないかと判断している。ただ詳細については該当期の出土遺物の僅少、狭掘という限定があって、全体像は明らかにすることできなかつたのであった。

つぎの縄文期のものは、厳密にいうと、さらに遺物から細分化しなければならない文化期のものを含んでおり、つまり新しい方から晩期のもの、中津式系を中心とした主に後期前葉のもの、そして中期に位置付ける滑石混入土器の時期のものである。そしてこれらの上器における出土比率は、最も高かったものが中津式系のもので、凡そ7割強を占め、勿論これには福田KⅡ式への過渡期のもの、または福田KⅢ式そのものも含めるほか、極めて僅少であった縁帶文土器というべきか否かのものも合わせると、8割に達するのではないかと想像している。またその逆に、第13図・図版7の1~4のように、阿高式系の範疇に捉えられるものもないでもないが、中津式との間隙を埋める土器も数点みられるなど、注意に値するであろうと考える。

さて、阿高式を中心とする滑石混入土器は約100点と、1割を充てはいないものの、他に滑石を含まないが、調整や施文形態などから広義でいうところの阿高式系に属するものも散見できるので、その数量は優に1割を越えるといってよい。そして一部には中期前葉に位置するという並木式も含んでいるが、その通説に従えば、本遺跡は並木式文化期に始まり、そしてその出土数量から阿高式文化期に成熟期を迎えたことになる。ただそこで問題になるのは、該当期間において他系統の影響を一切とり入れず、並木・阿高系といった主流のみをもって、形成されたとみるとには一種の不思議さを感じざるをえないものである。というのも、同支流域である中ノ坪遺跡^[1]では前期を主体とするものの、中期前葉の船元I・II式などを伴っており、同時期とされる並木系の文化があったとすれば、地理的

にも当遺跡との何らかの影響を受けても当然であろうと想像するのであるが、本遺跡ではまったくそういう形式のものは確認されておらず、逆に中ノ坪遺跡では並木式がまったくみられないということである。

そうした石ヶ坪・中ノ坪の両遺跡での相異なる状況は、何を意味しているのか判然としないが、船元式を中期前葉のものとして定位置付けて考えるならば、並木式は船元式とは併行するものではなく、中期中葉のものではないかと思いたくなるのである。したがって後続の阿高式を中期後葉のものとして1ランクずつ繰上げていくならば、時期上からは正当化できるものであろうと考える。

勿論、並木・阿高式、また中津式などの後期のものが5層という同一層内での包含だったため、層位的ではないことはいうまでもないが、しかし前述などの事例から2者は、今まで通説化していたものよりドリ、つまり中津式に近接しているのではないかと、恣意ながら思っているのである。そして問題は阿高・中津式との間隙であるが、その過渡期のものは、前述（第13図の2・3）の阿高終末期というべきものではないかと思っている。つまり凹線状でありながら、単的曲線ふうで、そこに後続の中津式を思わせる萌芽がみえないでもない、土器なのではないかと空想の域を出ないが、そう思っている。

なお晩期のものは極めて少量で、削平など影響があったと考えられる3層を中心とした上位層に出土したため、遺構は勿論のこと検出されず、資料的にも断片的で性格などについては明らかにできなかつたのである。

さて次に遺構についてであるが、本遺跡の文化期を3期と大別したうちの、つまり縄文後期のもの、そして中世前半期のものと想定できる2期において検出された。このうち前者の縄文文化期のものは、南北側の調査区（F～I調査区）を中心に検出され、それは柱穴状のビット、そして土坑とする2形態のものであった。

このうち土坑は、その坑上部辺に数石の配石を伴うものと、そうではない、ただの土坑のみのタイプが認められ、前者はG・H調査区（一部にはF調査区）のうちでも北半部に、また後者はその南半部そしてI調査区に検出されたのであった。前者の配石を伴う土坑は、層界（5・6層）面のものを捉えた限りでは長径約1m前後の楕円形を呈したもので、図面上では13基であった。ただし中には上坑に伴うらしい配石は認められたものの、5層という同一層内での検出であったため、その境界を捉えることができなかったものもあったり、また重複・連結した土坑などの相互の切り合い関係を把握しきれないものがあったので、その実数はより高いものであろうと思われる。これらは2坑から検出できた共伴遺物（中津式）から縄文後期初頭のものと想定され、また形態的には配石遺構ということができたのである。

また一方、南半部を中心にビットとともに検出された配石を伴わない土坑は、その辺部に土器とともに、とくに石器では打製石斧・石鎌・石錐などの利器の出土比率が高かったことから、配石遺構とは別機能をもった、つまり日常生活に伴ったものであったのではないかと、その出土傾向から想像している。そのほか、北半部のA～E調査区では2期（中世前半期）とする數穴のビットが検出されており、その径は凡そ40cmを測るものであつたらしく、概して大きいものといえる。ただし狭掘であったため、その柱列などについて読みとることができず、したがって具体的な構築物がどのようなも

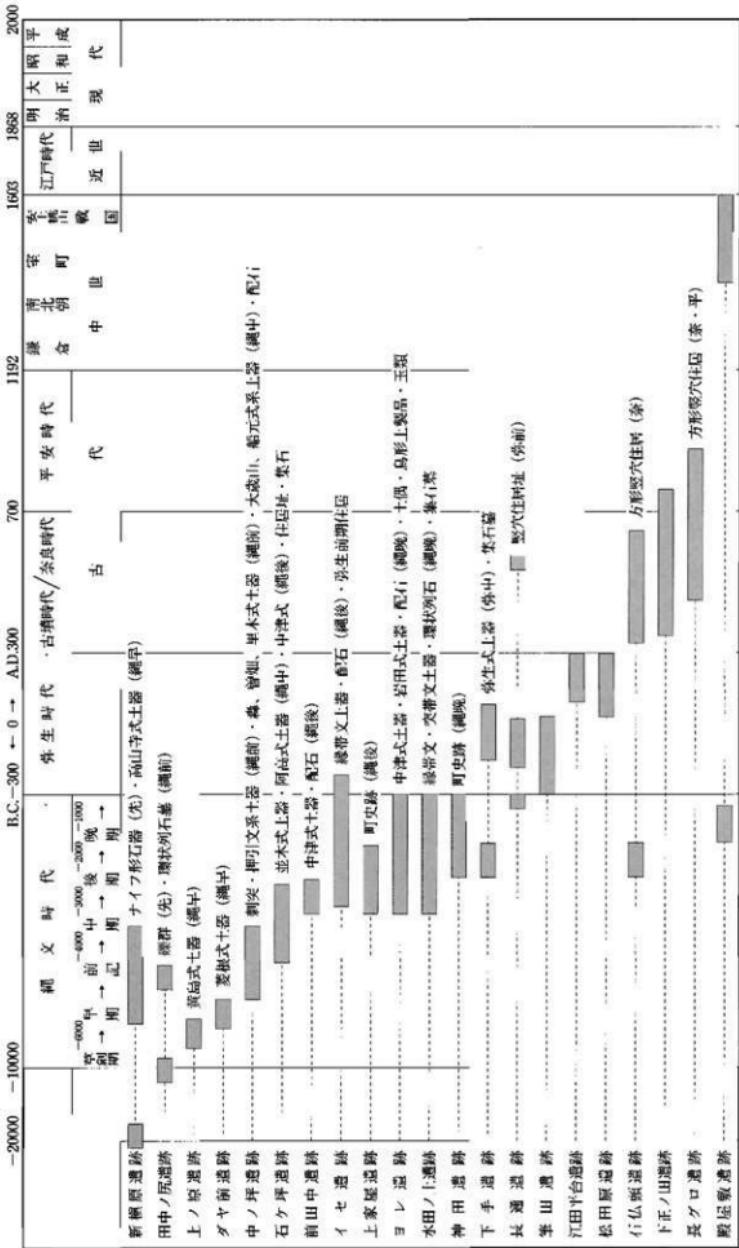
のであったかは明らかにできなかったのである。しかし、生活基盤を4層とした層位には上鍬が16点も出土するなど、そこには前面の河を意識して営まれた様子が垣間みられたのであった。

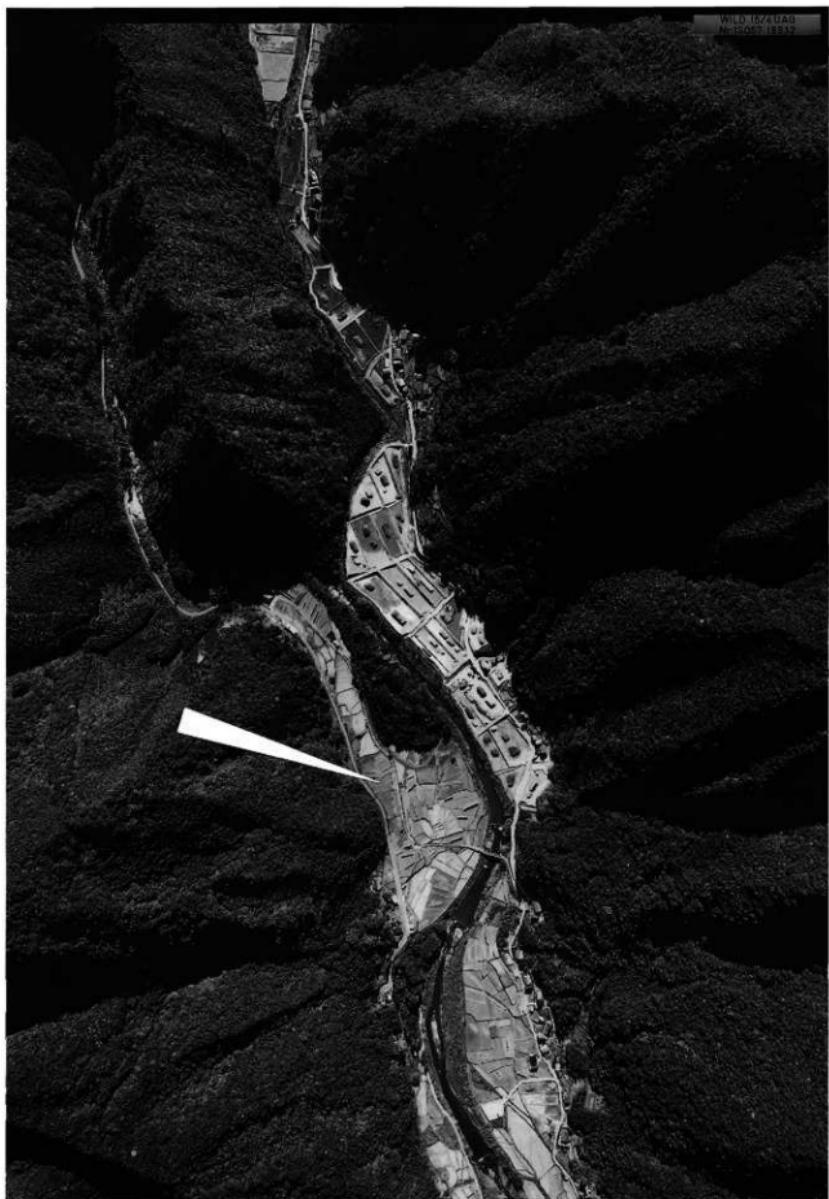
いずれにしても再三述べているように、今回の調査は狭掘であって、しかも山裾という立地であったため、そこには崩壊堆積土がみられたり、また人為の削平などがあって順調な堆積状況であったとは到底いえるものではなかった。そうした状況は遺物・遺構などの検出にも影響を及ぼしており、けして整合性のある調査ができたとはいはず、したがって明確な位置付けはできなかつたのである。ただ成果といえば冒頭で述べたように、遺跡の広がりを捉えられたこと、本遺跡が配石遺構を伴っていたことが明らかになったということであろう。そして大きな成果は、何といっても2400点という遺物が採り出され、今後の検討資料として遺されていくことにその意義があろうと考える。

(渡辺友千代)

〔註1〕 四見町教育委員会「中ノ坪遺跡」1999年

おもな匹見の遺跡消長表





鳥瞰する遺跡と周辺部

図版2



1. 紙祖川から捉えた遺跡の全景（北西から）



2. 対岸からみる遺跡の全景



3. 西側からみた遺跡の全景

遺
跡
の
近
景
と
作
業
風
景



4. 北西侧からみた遺跡の近景



5. 南東側からみた遺跡の近景



6. 山側から県道を挟んで調査区を見る（北東から）



7. I 調査区の発掘風景



8. G 調査区の発掘風景



1. A調査区の状況と北壁



2. C調査区の状況と北壁



3. C調査区の東壁（北西から）

各
調
査
区
の
土
層
堆
積
状
況



4. G調査区の西壁（南東から）



5. H調査区の東壁（北西から）



6. H調査区の西壁



7. I調査区の北壁（南東から）



8. I調査区の東壁（中央部）

図版 4



1. 柱穴状遺構の表出状況（D調査区）

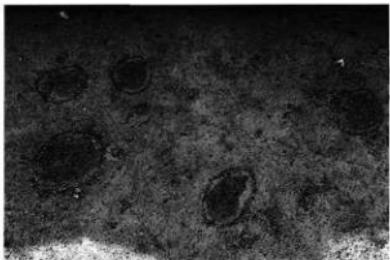


2. 土坑の表出状況（H調査区）



3. 土坑・配石遺構の表出状況（G・H調査区）

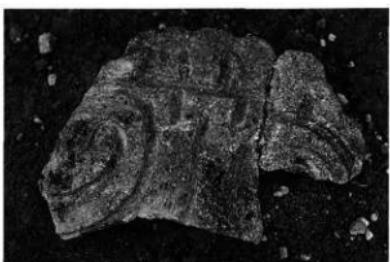
遺構と
遺物の
表出
状況



4. 柱穴状遺構の表出状況（I調査区）



5. 土器の出土状況（H調査区）



6. 阿高式土器の出土状況（H調査区）



7. 打製石斧の出土状況（H調査区）



8. 石器剥片の出土状況（G調査区）



1. G・H調査区の配石遺構（南から）



2. G調査区の配石遺構（西から）



3. H調査区からG調査区の配石遺構を見る

G
・
H
調
査
区
の
配
石
出
土
状
況



4. G調査区の東辺部の配石遺構



5. 北側からみたG・H調査区の状況



6. 東からみたG調査区の配石遺構

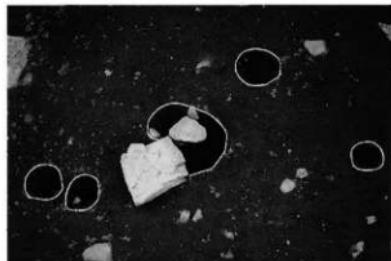


7. SK04遺構の検出状況

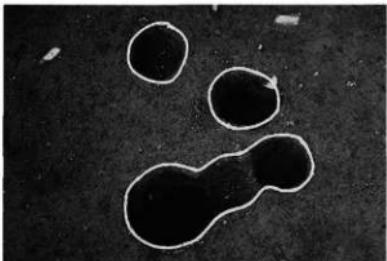


8. 北側からみた遺構完掘状況

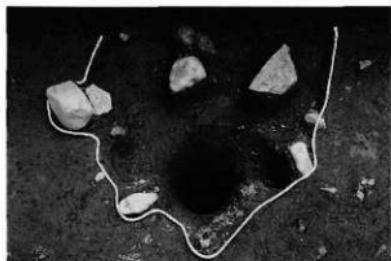
図版 6



1. D 調査区のP01・P02・P03・SK01（西から）



2. E 調査区のP02・P03・P04（南から）



3. F 調査区のSK01（北から）

各
調
査
区
の
遺
構
檢
出
狀
況



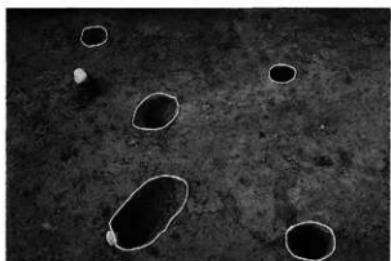
4. G 調査区の東辺部の遺構



5. G・H 調査区の接境部の遺構（南から）



6. H 調査区のSK01（北から）



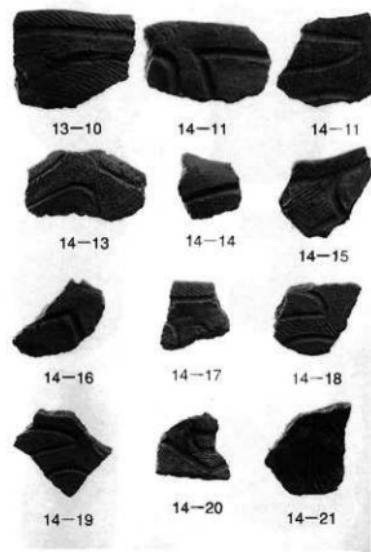
7. I 調査区のP08・P09・P10・P11・P12（南から）



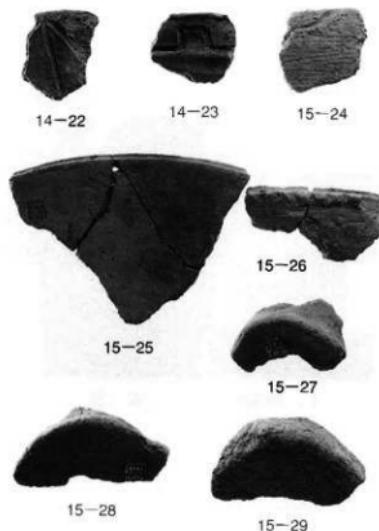
8. I 調査区の完掘状況（北から）



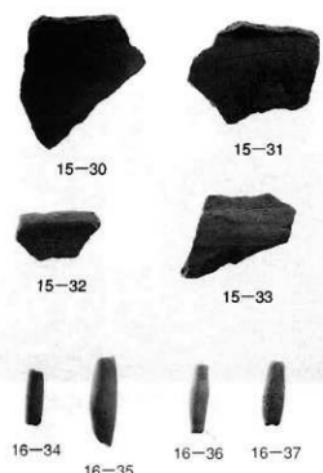
1. 繩文土器



2. 繩文土器

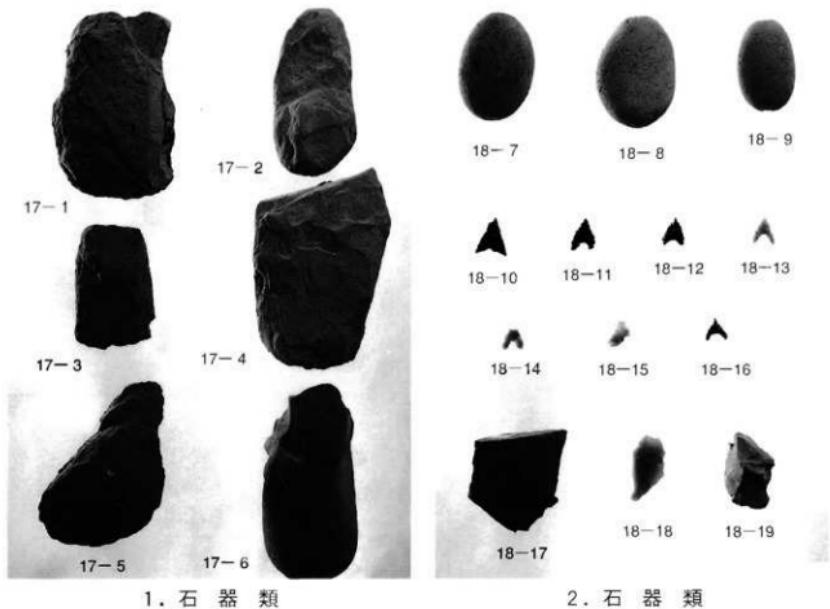


3. 繩文土器



4. 土師器・瓦器・土錘

図版 8



1. 石 器 類

2. 石 器 類



3. 第13図一5の阿高式土器（表）



4. 同図の阿高式土器（裏）

平成12年2月22日 印刷
平成12年2月28日 発行

匹見町埋蔵文化財調査報告書第31集

石ヶ坪A遺跡

発行 匹見町教育委員会
島根縣美濃郡匹見町大字匹見11260

印刷 株式会社 谷口印刷
島根縣松江市東長江町902-59